

三人の双生児

海野十三

青空文庫

あの一見奇妙に見える新聞広告を出したのは、なにを隠そう、この妾わたしなのである。

「尋タズネ人……サワ蟹ガニノ棲スメル川沿イニ庭アリテ紫ノ立タチ葵アオイ咲ク。ソソリヨウ太コウシキ格子ヘダヲ距ヘダテテ訪ヘダネ来ル手ハ、黄キ八丈ハチジヨウノ着物カニ鹿カノ子コシボ絞ボリノ広帯カッパヲ締カッパメ、才カッパ河童カッパニ三ツノ紅アカキ『リボン』ヲ附ハク、今ヨリ約十八年ノ昔ナリ。名乗リ出テヨ吾ガ双生児ハラカラノ同胞。 (姓名在社××××)」

これをお読みになればお分りのとおり、妾はいま血肉をわけたはらからを探しているのである。今より十八年の昔というから、それは妾の五六歳ごろのことである。といえは妾の本当の年齢が知れてしまつて恥かしいことではあるが、まあ算術などしないで置いていただきたい。

妾の尋ねるはらからについては、それ以前の記憶もなく、またその以後の記憶もない。まるで盲人が、永い人生を通じて只一回、それもほんの一瞬間だけ目があき、そのとき観たという光景がまざまざと脳裏（のうり）に灼（や）きついたりとも譬（たと）えたいのがこの場合、妾のはらからに対する記憶である。思うに、それより前は、はらからと一緒にいたこともあるのであろうが、当時妾は幼くて記憶を残す

ほどの力が発達していなかったのだろうし、それ以後は、妾とは
らからとが何かの理由で別々のところに引き離されちまって記憶
が絶えてしまったのであろう。とにかく川沿いの寮の光景は^{あたか}恰も
一枚の彩色写真を見るようにハッキリと妾の記憶に存している。

なぜ妾がはらからを探すのかという詳しいことについては、お
いおいとお話しなければならぬ機会が来ようと思うから、今はま
あ云うことを控えて置こうと思う。

——とにかく当時は五歳か六歳だった。黄八丈の着物に鹿の子
の帯を締め、そしてお河童頭には紅いリボンを三つも結んでいる
というのがそのころの妾自身の^{みなり}身形だった。妾の尋ねるはらから
というのは、その頃寮の中に^{しつら}設えられた座敷牢のような太い格子

の内側で、毎日毎日温和おとなしく寝ていた幼童ようどう——といつても生きていけば今では妾と同じように成人している筈だ——のことだった。

「なぜ、あの幼童は、暗い座敷牢へ入れられていたのだろうか？」
今もそれをまことに訝いぶかしく思っている。どうしたわけで、あの年端としはもゆかぬはらからをいつも暗い座敷牢のなかに入れ置いたのであろう。成人した人間であれば、気が変になって乱暴するとかのような場合には、座敷牢に入れて置くのは仕方ないことだったけれど、あの場合はともかくも五つか六つかの幼童ではないか、乱暴をするといつてもせいぜい障子しょうじの棧さんを壊すぐらいのことしか出来る筈がない。それぐらいのこのためにわざわざ頑丈な座

敷牢を用意してあつたことは、全く解きがたい謎である。

イヤよく考えてみると、あの幼童は別に気が変になつていたようにも思われない。そのころ妾は四度か五度か、或いはもつとたびたびだったかも知れないが、その幼童の座敷牢へ遊びにいった憶えがあるのであるが、決して乱暴を働いているところを見たことがない。乱暴をするどころかその幼童はいつも大人しく寢床の中にじつと寝ていたのであつた。ついぞ妾は一度も起きあがつているところを見たことがない。恐らく幼童は病身でもあつたのだらうと思う。一体病身の幼童を座敷牢へ監禁して置くような惨ざん酷こくきわまる親があるだらうかしら。考えれば考えるほど不思議なことではないか。

親といつたので、また一つ思いだしたけれど、妾がそのはらかなの幼童のところへ遊びにいったときは、いつも必ず座敷牢の中に、妾の母がつきそつていた。母はやさしく、寝ている子供のために機嫌をとつていたようである。広告文にもちよつと書いておいたことだけれど、妾はそのころ髪をお河童にして、そこに紅いリボンを二つならず三つまでもカンカンに結びつけて悦よろこんでいた。なぜそれをハツキリ憶えているかというと、座敷牢のなかの妾のはらからは、そのカンカンに結びつけた紅いリボンがたいへん気に入ったとみえて、或る日妾がツカツカと寮に入つていったとき丁度なにかのことで無理を云つて附添いの母を困らしていたかの幼童は、涙のいっぱい溜つた眼で妾のカンカンを見ると、突然ピ

タリと機嫌を直してしまつたのだつた。

妾はその後もたびたび母に特別賞与の意味でお菓子を貰つた上、その座敷牢へ連れてゆかれたように思うが、いつもそのカンカンに紅い三つのリボンを結んでゆくのがお決りだつた。それにつけて、また不思議なことをもう一つ思い出すが、妾はそのとき得意になつて暗い座敷牢の格子に駈けより、

「いいカンカンでしょ、ばア……」

と顔と髪とをさし入れたのであつたが、寝ているはらからはそのたびに味噌つ歯だらけの口を開けてキヤツキヤツと嬉しそうに笑うのであつた。それはいいとして暫くするとそこで母はきつと妾によびかけて、ちよつと庭の方へ行つて、立葵の花を一枝折つ

てきてくれと云いつけるのであった。それはいかにも唐突とうとつな云いつけであった。そんなときはらからの顔はいかにも不満そうにキユウと唇を曲げて母の方を睨にらむようにするのであるが、母はそれを優しく慰め、それから妾の方を向いて声をはげまし、早く庭へ下りて用事を果すように嚴げんぜん然と云いつけたのであった。

妾はしぶしぶ云いつけられたとおりに庭に下り、梅雨つゆちかい空の下に咲き乱れる立葵の一と枝をとっては、大急ぎでまた元の座敷牢へとび上っていった。

「いいカンカンでしょ、ばア……」

妾は立葵を格子の中になげこむと、同じ言葉をくりかえしているのであった。それを云わないと、母は妾を叱り必ず同じことを

云わせられたものだった。幼童のはらからは再び妾のカンカンを見て、いかにも面白そうにゲラゲラと笑うのであった。そういうときに妾は奇妙な思いをしたことがあった。それは大口を明いて笑う幼童の歯並が、或るときは味噌ツ歯だらけで前が欠けていたと思うのに、或るときは大きい前歯が二本生え並んでいたことがあった。これは幼い妾にとつては奇妙なことというより外に仕様のないことだった。

妾はそのほかにも、舌切雀の遊戯を踊ったりして寝ているはらからを悦ばせることをやったけれど、必ずその途中で母の命令が出て、妾は庭へ下りると立葵の花を折ってきたり、蜻蛉草かたばみを摘んできたり、或いはまた大笹の新芽から出てきた幅の広い葉で笹舟

を作つてもつてきたりするのであつた。しかしながら子供ごころにも氣のついたことは、庭へ下りて持つてくるのが、立葵であつても蜻蛉草であつても、それからまた笹舟であつても、どれであらうと大した違いがないのだった。つまり妾のはらからにしても、またそれを云いつけた妾の母にしてもが、折角せっかく持つてきてやつたものを殆んど見向きもしないで、ただ妾が、

「いいカンカンでしょ、ばア……」

と同じことをやるのに対して、たいへん悦び合うのだった。だから妾はたびたび庭に下りさせられるのがすこし不満になつた。あまり悦ばれもしないのに、そういちいち力を出して花や草を折つてくるのが莫迦ばからしくなつた。それで一度に草花を沢山とつて

懷中にねじこんで置き、母が庭へ下りて取つてこいと云いつけると、待つていましたとばかり、懷中からヒヨイと草花を取出して格子の中に投げ入れたのだつた。すると母は顔を赤くして、そんなずるいことをしてはいけない、すぐ庭に下りて新しいのを取つてくるようにと恐い顔をして云いつけるのであつた。妻はまたしても無駄骨でしかないことを庭に降りて繰りかえさねばならなかつた。その代り、母たちは妻の手折つてくる花や草が、たとえ破けていようが、汚れていようが、決して叱りはしなかつた。とにかく妾は必ず庭に一度降りてきて、それからまた座敷に上つてきて、もう一度はじめから同じことをして、かの不幸なはらからを慰めることが必要であつたのだ。だがなぜにそんな煩わしいこと

を繰返す必要があつたのか、どうも妾の腑に落ちかねる。

この紅いリボンのカンカンはよほど妾のはらからの気に入つたものらしく、或る日妾が何の気もつかずいつものような紅いカンカンを結んで座敷牢に近づくと、座敷牢に寝ていた幼童はさも待ちかねたという風に、いつになく頭を振つていまだ一度も見たとのなほ悦び騒いだ。妾は何ごとが起つたのだらうと訝しく思つてみると、傍に附添つていた母が、

「ホラ珠ちゃんたま（妾の名、珠枝たまえというのが本当だけれど）——このカンカンをみておやりよ……」

と妾に云うので、それで始めて気がついてよくよく幼童の髪を見ると、向うでも髪に、妾と同じような紅いリボンを、数も同じ

く三つつけていたのであつた。

「カンカン。……」

と廻らない舌で叫び、あとはキヤーツというような奇異な声をあげて、彼女——カンカンを結ゆつて喜ぶのだから、まさか「彼」ではあるまい、「彼女」にちがいはあるまい——妾と同じカンカンをつけているというので、たいへんな悦びようであつた。母はいつも彼女の背後に坐り、その頭の後方にある真黒な切布を覆つた枕とも蒲団ともつかない塊の上に手をかけて、妾たちを見守つていたのであつたが、このカンカン競べのあつたときは、どうしたものかその黒い切布をかぶつたものがまるで自ら動きでもしたように捲かれてきた。そのとき妾はその黒布の下に、また別な紅い

リボンがヒラヒラしているのを逸いちはや早く見てとつたものだから、
たちまち大変気色を悪くしてしまった。

「ずるいわずるいわ、あんたはあたいよりも沢山リボンを持っていて、隠したりなんかしているんですもの……」

と妾は格子につかまって駄々をこねだした。母はその内側でなにかひそひそ優しく叱りつけている様子であったが、それは妾を叱りつけているわけではなかった。と云つてヘラヘラ笑いつづけている機嫌のよい幼童を叱っているのだとも、すこし違っているように思えた。母は暫くしてから格子の外の妾の方を向き、

「珠ちゃん、リボンの数は皆同じよ。ホラよくごらんなさい……」
といった。そういわれてからよく見ると、妾のはらからの頭に

はチャンとりボンが三つついていた。さつき四つか五つぐらいに見えたのは思いちがいだったんだわと思つたことであつた。もちろんその日も、妾は次の順序として、庭に追いやられた。それから再び座敷へ上つてきてから、

「あんたも今日はいいいカンカンしているわねエ、皆同じだわネ」
と同じ祝詞しゆくしを呈して、再びはらからの大騒ぎをして悦ぶ様さまを見たのであつた。

格子のなかの妾のはらからについては、妾はそれ以外に多くを憶えていない。第一どうしても思いだせないのは、彼女の名前だつた。母は格子の中に寝ている子供を指して、これはお前のはらからで、同じ年である。お前の方がお姉さまだから、温和しく可

愛いがってあげるのですよといったのは憶えているのだが、どうしてもそのはらからの名前が思い出せない。ひよつとすると、母はそのはらからの名前を妾に云わなかったのかも知れない。

妾がはらからについて記憶していることは大体右のような事だけである。その後のことについては全く知らない。その後のことは、座敷牢のはらからのことだけではなく、妾の母についても知るところがない。なぜなら妾はそれから間もなく、母と不幸なはらからとに別れてしまったからである。それは突然の別れであった。それについては、いずれ後に述べることになるが、とにかく思いがけない事件が、妾から母と妹——カンカンを結って喜んでいたはらからのことを、妹と呼んでいいだろう——とを奪ってし

まったのだ。

その後ある機会に、妾の母は死んでしまったことを知った。そして残るのは妾の妹（？）の消息だけなのであるが、いま妾の企てている探索がもし成功しないとすれば、あの川添いの家でカンカンを見せ合ったときが、実に母と妹とに対する最後の別れとなるのである。

だが実を云えば、あの新聞広告は、妾のあのはらからの生死を確かめることも目的ではあるけれども、妾としてはもつともつと重大な意味があることを一言申しあげて置かねばならない。それはいかなるわけかと云えば、最近妾は偶然の機会から船乗りだった亡父の残していった日記帳を発見し、その中に、実に何といった

らいいか自分の一身上について、大きな謎に包まれた記載文を發見したのである。その文意は、気にしないでいるのにはあまりに奇々怪々に過ぎるのである。

——いまから二十三年前の二月十九日の父の日記帳には、次のようなことが書きつけてあった。

「二月十九日。——呪われてあれ、今日授さずかりたる三人の双生児！」

三人の双生児？

二人の双生児なら、これはよく分るが、三人の双生児とはどうしたことであろうか。三とあるのは二の誤記ではあるまいかと思つたが、よく考えてみると、双生児が二人なら、別に改まつて

「二人の双生児」と断る必要はない筈である。三人だからこそ不思議なので、三人のと断つたものだと考えられる。二月十九日といえ、たしかに妾の誕生日なのである。これは妾の手文庫の中にあつた妾の緒にチャント書いてあつたから間違ひはないと思う。すると二月十九日には妾の外にもう二人のはらからが誕生したことになる。

もつとも父は「授かる」と記し、「家内が産んだ」とは書いてないので、疑えば疑えないこともないが、まず授かるといえば、父の子供として認める意志があつたように取れるので、出産のあつたものと見るのが無難だと思う。

すると妾の母は、三人の双生児を生んだのであろうか。そしてそのうちの一人が、この妾なのである。残りの二人は何処にいたのであろうか。どうして三人で双生児なのであろうか。そういうことはあり得ることではない。二人ならば双生児だし、三人ならばどうしても三つ子といわなければならぬ。いくら三つ子が生れたからといって、父が三つ子を双生児と書き誤る筈はないと思う。そうなると、三人の双生児という有り得べからざる名称のう

ちに、何か異状の謎が語られていることになる。

妾はいろいろと縁みよりを探してみた。だがそれがどうしてもハツキリ分らない。実は父が死んだときは、妾が十歳のときのことであるが、そのとき父についていた身内というのは妾一人だった。しかも生れ故郷を離れて、妾たちは放浪していたその旅先だった。前に妾が述べたように、妹とカンカン競べをやったのが最後となつて、母と妹とに別れた話をしたが、両人が妾の前から見えなくなつて間もなく、父は親類の赤沢さんの伯父さんと大喧嘩をやつたことを憶えている。恐らくこの喧嘩は母と妹とが見えなくなつた事件と関係のあることだろうとは思ふが、詳しいことは知らない。

と、間もなく妾は父に連れられて故郷を立ち、貨物船に妾ともども乗り組んだ。それから妾は父の死ぬまで四五年の海上生活を送ることになり、船の上で物心がついてきたのであった。

「お母アさま、どうしたの？」

と、妾はよくこの質問を父にしたことだった。それを云うと、父は急に機嫌を悪くして噛んで吐きだすように云った。

「おツ母アはどこかへ逃げちまったよ。お前が可愛くはないのだからうて」

「あの立葵の咲いていた分れ家のネ」

「ウン」

「あの中に、あたしの同胞はらからがいたわネ。あの子を連れて逃げちや

つたのでしょ」

すると父は首を大きく振って、

「イヤイヤそうじゃないよ。あの子は赤沢の伯父さんが、どっかへ連れていってしまったんだよ。おツ母アは、あの子も可愛くないのだろう」

「じゃお母ア様は、誰が可愛いの」

「そりや分らん……赤沢にでも聞いてみるのじやナ」

父は苦い顔をして応えた。

「ねえ、お父さま。もとのお家へ帰りましょうよ、ねえ」

「もとのお家？ なぜそんなことを云うのだ」

と、父は俄かに声を荒らげていたのであった。

「もとの土地へ帰っても、もうお家などは無いのじゃ。あんな面白くもないところへ帰ってどうするんか。この船の上がいいじゃないか。じつとして、どんな賑かな港へでもゆける」

父は故郷を呪ってやまなかつた。

「お父さま。あたしたちの故郷は、何というところなの」

「故郷のところかい。おお、お前は小さかつたから、よく知らんのじゃなア。イヤ知らなけりや知らんでいる方がお前のためじゃ。そんなものは聞かんがいい、聞かんがいい」

と云つて、父は妾が何といつて頼んでも、故郷の地名を教えなかつた。だから妾は、幼い日の故郷の印象を脳裏(のうり)にかすかに刻んでいるだけで、あの夢幻的な舞台がこの日本国中のどこにあるの

やら知らないのであった。

いまにして思えば、あのととき何とかして故郷の方角でも父から訊きだして置くのであったと、残念でたまらない。なぜなら、その後父は不^ふ凶^と心変りがして船を下り、妾を連れて諸所贅^{ぜいたく}沢な流浪を始めたが、妾が十歳の秋に、この東京に滞在していたとき、とうとう卒中のために瞬間にコロリと死んでしまった。そしてとうとう妾は永久に故郷の所在を父の口から聞く術^{すべ}を失ったのであった。それから後ずっとこの方、故郷はお伽^{とぎばなし}噺の画の一頁のように、現実の感じから遠く距^{へだた}つてしまったような気がする。

幸いに父が持つて歩いていたトランクの中に、相当多額の遺産を残して置いてくれた。それは主として宝石と黄金製品とであつ

だが、父が海外で求めて溜めていたものであろう。その遺産故に妾を世話する人もあつて、こうして東京の地に大きくなる事が出来たのであつた。いま妾は至極気楽に見える生活をしている。数年前には、話が出来て聳むこをとつたけれど、彼は二年ばかりして胸の病気で針金のように瘦せて死んでしまった。それからこつち妾は気楽に見える若い有閑未亡人ゆうかんマダムの生活をつづけている。再縁の話も実は蒼蠅うるさいほどあるのではあるが、妾は一も二もなくこれをお断りしている。結婚生活なんて、そんなに楽しいものではないからである。それにこの節は、結婚などということよりも、もつともつと気にかかることがあつて、その方へすつかり精力を引よせられているので、男のことなんか考えている余裕がないのであ

る。気にかかることというのは、もちろんこれまでにお話したとおり、生死不明の妾のはらからを探しあてることが出来るかどうかということである。そして、妾の名誉のためにも誇りのためにも三人の双生児の謎を解くことができるかどうかということである。

あの新聞広告を出したその翌日から、妾の住んでいる渋谷羽沢しゅぶやはしわの邸は俄かに賑かになった。それは新聞広告をみてから各種の訪問客が殖えたということである。それはきつと妾のことだろうといつて、はらからを名乗ってくる人が毎日十二三人ある。併し随分平気で出鱈目でたらめをやれる人があると見えて、やってくる人の殆んどは三十歳を越している。妾が本年二十三歳なのを考えれば、も

つと早く気がつく筈だと思うが、妾の前で滔々^{とうとう}として原籍や姉妹のことを喋ってしまったて、大分経ってから気がついて急に逃げだすというのが多い。ただその中に三人だけ、妾の関心を持てる人が混っているのである。

まず第一にお話しなければならぬのは、速水春子^{はやみずはるこ}という女流探偵のことである。彼女はあの新聞広告を見ると、早速妾のところへやって来た。妾はお手伝いさんのキヨに、一応その女流探偵の身形その他を訊きただした上で、客間に招じて逢ってみた。

春子女史は、薄もので拵^{こしら}えた真黒の被布に、下にはやはり黒っぽい単衣^{ひとえ}の縞もの銘仙を着た小柄の人物で、すこし青白い面長の顔には、黒い縁の大きな眼鏡をかけて、ちよつとみたところ年齢

のころは二十五六の、まずポインター種の猟犬が化けたような上品な婦人だった。妾は女探偵などというと、もつと身体の大きな体操の先生のような婦人を想像していたのであるが、速水春子女史はそれとは違った智恵そのもののような女性だった。しかし彼女の眼だけはギロリと大きくて、妾にとってはたいへん気味がわるかった。

「新聞で拝見しましたんでございますけれど……」

と女史はさも慣れ切っているという風に話の口を切った。

「たいへん六ヶ敷むっし敷しそうなお探しものでいらつしやいますのネ。あたたくしにお委せ下されば、イエもう永年の経験でこつは弁わきまえて居りますから、すぐに貴女さまのご姉妹を探しだしてごらんに入れ

ますわ。……ええと、それでまずその問題のお父上の日記帳というのを拝見しようございますが……」

妾は手文庫のなかから、父の日記帳をとりだした。それはポケット型というのであろう、たいへん小さな冊子で黒革の表紙もひどく端がすりきれて、その色も潮風にあたつて黄いろく変色していた。それを開くと、中は罫なしけいなしの日附は自由じゆうに書きこめるという式の自由日記で、尖さきの丸い鉛筆を嘗なめ嘗なめ書きこんだらしい金釘流の文字がギツシリと各頁に詰まっていた。女流探偵はその中の或る日記を声を出してよみだした。

「ほう、こんなことが出ていますわ。——二月一日、『タラップ』ノ手摺ヲ修繕スル。相棒ガ不慣なテナカナカハカハカド抄ハカドラヌ。去年ノ今頃モ

修繕シタコトガアツタツケガ、ソノトキハ赤沢常造ノ奴ガイタカラ、半日デ片付イタモノダ。彼奴ガ下船シテ故郷ニ引込ンダノハソノ直後ダツタ。モウ一年ニナルノニ、彼奴ハ故郷ニジツトシテイテ、ドコニモ働キニ行コウトシナイ。ワシハオ勝ノコトガ心配デナラン。ト云ツテモ、オ勝ハモウスグオ産ヲスル。オ産ヲスルマデハ、イクラ物好キナ彼奴トテモ手ヲ出ス様ナコトガアルマイ。トハ云ウモノノ、女ヲ盗ムニハ妊婦ニ限ルトユウ話モアルカラ、安心ナラン——ほほう、亡くなつた貴女さまのお父さまは、この赤沢常造という男を大分氣にしていらつしやるようですが、これはどんな關係の方でございましたでしょうか」

「その赤沢というのは、伯父さんだと憶えています。一度父と大

喧嘩をしたので、あたしは知っているのです」

「どんなことから大喧嘩なすつたのでございましょう」

「さあそれは存じません」

「それは重大なことですね。……それから奥様のお生れ遊ばしたのは何日でございましょうか」

「その日記の最後の日附がそうなのです」

「ああそうでございますか。そうそう、この同じ二月十九日に、貴女さまはお生れ遊ばしたのでございませぬ」

そういつて春子女史は日記の頁の最後のところまでめぐり、

「ああ、ありました。二月十九日、オオ呪ワレテアレ、今日授カツタ三人ノ双生児！ これでございますネ。三人の双生児！」

と、女流探偵は深刻な表情をして、三人の双生児！　と口の中でくりかえした。

「いかがでございましょう。お心あたりがありました」と訊^{たず}ねると、女史は、

「これは現地について調べるのが一番早や道でございますわ。探偵が机の上で結論を手品のよう^にに取出してみせるのはあれは探偵小説の作りごとでございますわ。本当の探偵は一にも実践、二にも実践——これが大事なので、そこにあたくしたちの腕の奮^{ふる}いどころがあるのですわ、奥さま」

「でもその現地というのが雲を掴むような話で第一何処^{どこ}だか見当がついていないのですよ」

「それは奥さま、調べるようにいたせば、分ることでございますわ」

と女史は怯むひる気色もせず云い放った。

「広告にお書きになりましたサワ蟹とか立葵とかは、日本全国どこにもございまして、これは手懸りになりません。でも奥さまは、もつと何か地方的な特色のあることを御存知の筈と存じますわ。

お小さいとき、よくお氣のつくものとしては物売りの声、お祭りなどの行事、その辺のごく狭い地区の名、幼なおさ馴染なじみの名などでございまして、一つ思い出していただきましょうか」

そこで妾は変な諮問しもんを受けることとなった。

「物売の声で、なにか憶えていらつしやるものはございませぬ？」

「さあ、——」

と妾はこの意外な問いにすくなからず驚いた。そして長い間考えていたが、やつと一つ思い出すことが出来た。

「そうです、魚売りのおぼさんの呼び声を思い出しましたわ。こ
うなんです——いなやかれいやちくわ竹輪はおいんなはら—んで、という」

「おいんなはら—んででございますか。たいへん結構なお手懸り
でございますわ。ではもう一つ、お祭の名称など、いかがでござ
います」

「さあ、——明神さまのお祭りだとか、それから太い竹を輪切り
にしてくれるサギツチヨウなどというものがありました」

「ああ左義長さぎちようのことですネ。それも結構です。それからこの辺

の村の名とか町の名とか憶えていらつしやいません」

「近所の地名ですか何ですか。アタケと書いていましたわ」

「ああアタケ、安宅と書くのでしよう。ああ、それですつかり分りました」

と、春子女史はいった。

「すると奥さまのお郷里くくには四国です。阿波の国は徳島というところ、安宅という小さな村があります。そこならサワ蟹ちよつとだつて、立葵だつて沢山あります。ではあたくし、これから鳥度ちよつと行つて調べて参ります。四五日の御猶予ごゆうよを下さいませ」

女史の探偵眼はたいへん明快であつた。どうして、そんな明快な答が出たのか妾には合点がゆかなかつたけれど、彼女は別に高

ぶる様子もなく、妾の故郷だという四国の安宅村へ、三人の双生児の実相を確かめるために発足するといつて辞し去つた。妾は狐に鼻をつままれたように、女史を見送つたが、後になつて一切が判明するまではこの女流探偵の神通眼じんつうがんは単に出鱈目だと思つていたのであつた。

3

新聞広告を見て妾を尋ねてきた人の中で、第二にお話しておか

なければならぬのは、安宅真あたかしんいち一いちという青年のことだった。その青年は、背が極ごくく低くて子供ぽかった。身長五尺四寸に肥満性という女の妾と較べると、まるで十年も違う弟のように見えた。そして痩せている方ではなかったが、顔色は透きとおるように白く、捲くれたような小さい唇はほんのちよびり淡紅色に染まっているというだけであつて、見るからに心臓に故障のあるのが知られた。顔だちも妾とは違つてメロンのようにまん丸かつた。

その安宅という青年が邸に来たとき、妾は彼があまりに年端としはもゆかない様子なのを見て、一体何の用で来たのか会つてみたくなつた。それで客間に招じて応接してみると、やはり用というのは、自分こそは貴女の探している双生児の片割れであろうと思つてや

つて来たというのであった。

「嘘を仰おっしや有い。あんたは一体いくつなの。妾よりも五つ六つ下じゃないの」

と妾は少年——でもないが、その安宅真一を頭から擲からか揶かつた。

「そんなことはないでしょう。僕、これでも二十三か四なんです」
「あら、妾が二十三なのを知つてて、わざとそんなことを仰有るのでしょう」

「いえいえ、そんなことはありません。本当に二十三か四なんです」

「二十三か四ですつて、三か四かハッキリしないのは、一体どう
いうわけなの」

安宅青年はそこで物悲しげに眉をしか顰めてから、

「実は僕は親なし子なんです。兄弟があるかどうかも分っていません。どうにかして小さいときのことを知りたいと思って気をつけていたところへ、あの新聞広告が眼についたのです。世の中には似たような人もあるものだなと思いました。とにかく伺ってみれば、もしかや自分の幼いときのことの方が分る手懸りがありはしないかと思つて、それでやつて来たというわけです。僕は小さいときのことをすこしも憶えていません。記憶に残っている一番古いことは、たしか八九歳の頃です。そのころ僕は、お恥しいことですけど、見世物に出ていました。鎮守さまのお祭のときなどには、ふるのぼり古職をついだ天幕張りの小屋をかけ、貴重なる学術参考『世

界に唯一人の海盤車娘ひとでむすめの曲芸』というのを演じていました」

そういつて語る安宅の顔付には、その年頃の澆はつらつ刺たる青年とは思えず、どこか海底の小暗い軟泥なんでいに棲すんでいる棘皮動物きよくひの精が不思議な身みの上うえ咄うたを訴えているという風に思われた。真一は言葉を続けて、

「僕を持っていたのは蛭間興行部の銀平という親分でしたが、僕は祭礼に集ってくる人たちから大人五銭、小人二銭の木戸をとつた代償として、青いカーバイト灯の光の下に、海底と見せた土間の上でのたうちまわり、自分でもゾツとするような『海盤車娘』の踊りや、見せたくない素肌を曝さらしたり、ときにはお景物まけに濁どぶろ酒くくさい村の若者に身体を触らせたりしていました。もちろん

見物の衆は、僕のことを女だと思つていたのです。本当は僕は立派に男なんです。けれど生れつき血の気のないむっちりとした肉体や、それから親分の云いつけでワザと女の子のように伸ばしていた房々した頭髮などが、僕を娘に見せていたのでしょうか」

「海盤車娘つて、あんたの身体になにか異つたところでもあるんですか」

と妾はゾクゾクしながら尋ねたのだった。

「それは異状があれば有るといえるのでしよう。でも結局は興行師の無理なこじつけでした。それで見物の衆はインチキ見世物を見せられたことになると思うのですが、実は僕の背の左側に楕円形の大きな癍痕きざずがあるんです。そして僕がその癍痕を動かそうと

すると、その癍痕は赤く膨^{ふく}れて背中よりも五六分隆起して上下左右思うままにピクピクと動くのです。ですからどうかすると、むかし僕の背中には一本の腕が生えていたのを、その付け根から切断したために、跡が癍痕になつていようにも見えるのでした。

見世物になるときは、そこにゴム製の長い触手をつけ、それを本当の腕であるかのように動かすのでした。つまり僕は二本の脚と三本の腕とを持っているので、丁^{ちようど}度五本の腕の海盤車の化け物だということです。いかがです。もしお望みでしたら、今此所でその気味の悪い癍痕をごらんに入れてもようございます」

「まあ、ちよつと待つてちようだい——」

出されてはたいへんなので、思わず妾は悲鳴にちかい声をあげ

た。なんといいやらしい男があつたものであろう。新聞広告を出したために、たいへんな人間がとびこんできたものであつた。

肩口のところで紅くなつてムクムク膨れ出してくる第三本目の腕の痕など、ちよつと一と目見たい好奇心もおこるけれど、やはり恐ろしかつた。白面しろつふでもつて、そんないやらしいものを見られるものじゃありやしない。これは随分変態的な男であると呆あきれるより外ほかなかつた。でもどうしたというのであろう。呆れるという以上ほかに、近頃刺戟に飢えているらしい我が身にとって何かしら、気にかかることでもあつた。

「それであんたは妾の兄弟だと思つてゐるの」

と、妾は話頭を転じたのだつた。

「さあ、それを確かめたくて伺ったのですけれど、とにかく僕は貴女がなにか関係のある人に思われてならないのです」

聞けば聞くほど、興味の深い海盤車娘ひとでむすめの物語ではあつたけれど、妾はそれ以上聞いているのに耐えられなかった。それでもういい加減に、この変な男に帰ってもらいたくなくなった。それで妾は最後にハツキリと云つてやった。

「こうして話を伺っていると、あたしとあんたとは、たいへん身の上が似ているように思いますわよ。でも、あたしとしては、知りたいと思う一番大事なことが、いまのあんたの話では説明されてないように思うのよ。第一それはネ、あたしと双生児のその相手というのは、あんたみたいに男ではなくて、女だと信じている

わ。つまりこういうのよ。あたしが小さいとき、その双生児の寝ている座敷牢のようなどころへ行つたときに、その子は頭髮に赤いリボンをつけていたのをハッキリ憶えているのよ。赤いリボンをつけているんだから、きつとその子は女に違いないと思うわ」

「しかし僕は、長いこと女の子にされてしまつて海盤車娘というやつをやっていました。女といえば女じゃありませんか」

「さあ、それは違ふでしょう。あんたが女の子に化けたのは八九歳から後のことでしょう。興行師の手に渡つてから、都合のよい女の子にされちまつたんじやありませんか。あたしの憶えているのはずっと幼い五六歳のころのことです。その頃のあたしはちやんと父母の手で育てられていたので、男の子を特別に女の子にし

て育てるといふようなことはなかったと思うわ」

「そうでしようかしら」

と真一は物悲しげに唇を曲げた。

「それにサ、世間をみても双生児には男同志とか女同志とかが多いじゃないこと。そしてさつきからあんたの顔を見ているのだけれど、あんたとあたしとはまるで顔形も違っていれば、身体つきも全然違っているように思うわ。ね、そうでしよう。どこもここも違っているでしょう。強いて似ているところを探すと、身体が痩せていないで肉がボタボタしていることと、それから月の輪のような眉毛と腫れぼったい眼瞼とまアそんなものじゃないこと」

「それだけ似ていれば……」

「それくらいの相似なら、どんな他人同志だって似ているわよ。とにかくあんたは、あたしの探している双生児の一人じゃないと思おうわ」

「そういわないで、僕を助けて下さい」

と真一は両手で顔を蔽い、ワツと泣きだした。

「ぼ、僕はいま病気なんです。それで働けないのです。僕はもう三日も、碌ろくに食事をしないでいます。ますます身体は悪くなつてきます。お願いですから、助けて下さい」

こんなことになってしまって、妾はたいへん当惑とうわくした。これはなんとかして、早く帰ってもらわないといけないと思つた。それには彼が居たたまれないように、もっと弱点をつくことにある

と思った。

「あたしは、本当のはらからを見つけたくてあの広告を出したのよ。あんたは知らないでしょうけれど、あたしは双生児でも、三人一組なのよ。つまり三人の双生児であると、死んだ父が日記に書き残してあるわ。この点からいってもあんたの持ってきた話の中には三人の双生児という重大な謎を解くに足るものがすこしも入っていないじゃありませんか。だからたいへんお気の毒だけけれど、あたしはあんたを兄とも弟とも認めることができないのよ。ネ、わかるでしょう」

畳に身を伏せて、嗚咽おえつしていた真一は、このとき俄かに身体をブルブルと震わせ始めた。それは持病の発作が急に起ってきたも

のらしかつた。彼は苦しげに胸元を掻きむしり、畳の上を転々と
して転がった。あまりに着物を引張るので、その垢じみた単衣は
べりべり裂け始め、その下から爬虫類はちゆうるいのようになつとりした光こ
沢うたくのある真白な膚はだが剥むきだしになつてきた。そして妾は、はか
らずもそこに遂に見るべからざるものを見てしまった。真一の背
にある恐ろしき癩痕きざ！

「おおいやだ——」

彼の話まに勝まつて、それはなんという気味の悪い癩痕だつたらう。
それは確かに生きている動物のように蠢うごめいた。或いは事実そこ
に腕ふとのような活潑なものが生えていたのかもしれない。そのとき
不ふ図と妾は、いままでに考えていなかったような恐ろしいことを考

え出した。それは真一の癍痕のあるところに、もう一つ別の人間の身体が癒着ゆちやくしていたのではなからうか。いわゆるシヤム兄弟と呼ばれるところの、二人の人間の一部分が癒着し合って離れることができないという一種の畸形児のことである。つまり真一の場合は、もともと二人であったものが、癍痕のところ切開されて別々の二体となったものではあるまいか。そうすると別にあつたもう一つの人体はいまどこに居るのだらう。そう考えると、たいへん恐ろしいことだった。

「だが、それは真一の場合の恐怖であつて、あたしの身の上の恐怖でないからいい！」

と妾は口の中で云つてみた。前にも云つたように、真一と妾と

では、双生児らしく似かよったところがないと思う。双生児に二種あつて、一卵性双生児と二卵性双生児とがある。前者はたいへんよく似た瓜二つの双生児が生れるし、後者はそれほど似ていない。似ていないといつても、普通の兄弟姉妹を並べてみたときのように、これははらからだと一見して分る程度にはよく似ているのだつた。妾と真一の場合を比べてみると、もちろん一卵性双生児のように瓜二つではないことは云うまでもないが、また二卵性双生児といえるほども似ていない。ややどこかが似ていないでもないが、その程度はとて二卵性双生児などと認められるほどのものではない。だから結局妾と真一とは、それほどの仮定を考へてすら双生児らしいところがなかつた。

「その上、もつとハッキリした否定証明がある！」

妾はもう一つ否定証明を考えついた。それは六ヶ敷むっしい医学的な証明でない。つまり仮りに真一にシヤム兄弟的なもう一人の人間があつて、それと妾とが同じ日に同じ母から分娩されたとしたら、これは常識からいっても所謂いわゆる三つ子である。つまり丁寧にいえば三人の三生児と呼ぶことが出来てもこれを三人の双生児と呼ぶことはできないであろう。

結局妾は疑心暗鬼から、たいへん入り組んだことまで考えたが、これは考えすぎてたいへん莫迦をみたようなものであつた。まるで抜け裏のない露地を、ご丁寧ごていねいに抜け路があるかしらと探しまわつて草臥くたびれもうけをしたようなものであつた。ともかくこれで真

一の場合は、妾に関係のないことがハッキリ証明できたように思うのであるけれど、それでいてなお、なんとなく気がかりなのは、どうしたことであろうか。それは妾の身の上を離れて、真一が背中にもつあの癍痕の怪奇性が妾を脅かすのであろうか？

とにかくそんなことは忘れてしまつて、妾は父が手帳の中に書きのこした「三人の双生児」という字句が持つ秘密を、別な方面から調べてみなければならぬ。それはもつともつと別の種類のことなのではなからうか。「三人の双生児」のなかの一人は、どうしても妾の身上のことなんだからして、残る二人の人間という不合理に見える合理を解きあげて妾の重い負担を下ろすことにしたいものである。

四国の徳島へ出発した女流探偵速水春子女史は、越えて十日目に、たいへん緊張した顔付で妾の邸を訪れた。

「まあ、奥さま。どうか吃^{びっくり}驚なさいますな。あたくしはとうとう、貴女さまのほんとおはらからを探しあてて参りましたのでございますよ」

妾は女史の言葉を、俄かに信ずる気持にはなれなかった。この

六ヶ敷むつしい同胞はらからさがしがそんなに簡単に解けようとは考えてはいなかつたからである。

「ねえ、奥さま。お驚き遊ばしてはいけませんよ。詳しいことを申し上げるより前に、まずあたくしのお連れ申して来たお妹さま……とでも申しませうか、それともお姉さまと申上げた方がよろしゅうございませうか。とにかく同じ年の二月十九日に、御母堂に当ります西村勝子様がお産み遊ばしたお二方のうち、珠枝さま——つまり奥さま——ではない方のもう一方——その方のお名前を静枝さまと申上げますが、その静枝さまをお伴い申したのでございます。いま御案内申し上げますから、なによりもお会い下すつて、よくよく御覧遊ばして下さいませ。あの、静枝さま。」

どうぞ、こちらへ」

饒じょうぜつ舌せりふ 女史は可愛げもない台詞をのべたててから、次の間の

方へ声をかけた。

ふすま

襖の外では微かすかな返事があつて、やがてやさしい衣摺きぬずれの音と

もに、水々しい背の高い婦人が入つて来た。妾はその婦人を一
 みて、どんなに驚いたことであろうか。まことに吾れながらその
 顔形といい、軀つきといい、髪や衣服の趣味、さては化粧の癖に
 至るまでこんなにもよく似た婦人がいるものかと、暫くは呆然ぼうぜん
 と打ち見護つていたほどであつた。これが話したいという第三の
 人物である。

「あら、お姉さまでいらつしやるの。……まあお懐しッ。あたく

し静枝ですわ。おお……」

といつて、その静枝嬢はバタバタと畳の上を飛んでくるなり、妾の胸にとりすがつて、嬉し泣きにさめざめと泣くのであった。それはまるで新派劇の舞台にみるのとソックリ同じことで、いほど感激の場面が演ぜられたのだつた。とり縋すがられた途端に妾もハツと胸ふさがり、湧きくる涙なみだを塞ふさぎ止めることができなかつた。「おん二方さま。お芽出とう御祝詞を申し上げます。あたくしも思わず貰い泣きをいたしました」

と速水女史までもが、新派劇どおりに目を泣き腫らしたのだつた。

「一体これはどういう事情だつたんです」

と妾はいつまでも鼻をかんでいる速水女史に尋ねた。

「いえもうそれは、たいへん混み入こった話になりますが、今日はちよつとかい摘つまんで申上げます」

と饒舌女史が語りだした省略話をもう一つ省略して述べると、次のような事情であると分つた。

——速水女史が徳島の安宅村というところへのりこんできいてみると、妾の母の勝子はもちろん死んでいて問題の幼童——つまり静枝のことを聞きだすべくもなかった。それから伯父の赤沢常造のところところに静枝がいたということであるから、これを質ただしてみたが、自分のところに、その幼童をちよつと預かつたことはあるが、間もなく母の勝子が連れだしたまま行方不明になつてしまつ

て、自分は知らないという。そこで村の故老などにいろいろ聞きあわした末、その幼童が静枝という名を名乗つて、徳島市の演芸会社の社長の養女に貰われていたところをつきとめて、それで無理やりに東京へひっぱつて来たのである。向うでも永く離したがらないので、四五日滞在したら、なるべく早く帰郷するようにと、養父の銀平氏から頼まれて来たというのであつた。

妾は気味のわるいほど実に自分によく似た静枝と、いろいろ故郷の話や、幼いときの話をした。彼女は妾の知っていることは残らず知っていて、すべてはよく符合した。妾を見習つてカンカンに赤い三つのリボンをかけたこともよく覚えていそうであるし、紫の立葵たちあおいのこと及びその色ちがいのもので赤や白のものがあるこ

とや、日本全国到る処に棲息するサワ蟹のこと、特にその鋏に大小の差があつて鋏に糸をつけるとすぐそれが挽げることなどをスラスラ語つた。

「静枝さん、あなたはどうしてあの座敷牢のようなところに入つて暮していたんですの」

と妾はかねて聞きたく思つていたことを聞いてみた。

「それはこうなのでございますわ。あたくしはどうしたものか、極く小さいときから夢遊病を患つていたのでございます。それで夜中に起きてどこかへ行つてしまふようなことがあつてはと、いつも座敷牢の中に入れられていたのでございますわ」

「でもいつでも貴女は寝てばかりいて、起きてたところを見たこ

とがないわ。昼間から寝てばかりいたのは何故ですの」

「あれはこうなのでございます。あたくしは或る夜、夢遊して外に出たんですの。そして不幸にも崖から川の中へ落ちて足を挫き、腕を折り、ひどい怪我をしたことがあるので、それで立ち上れなくて、いつも寝ていました」

「ああそうだったの。気の毒だったわね。でも、脚を挫いているのなら夢遊でも外は歩けないのじゃない」

「いえそれはこうなんですの。夢遊病者は、たとえ足が悪くても、そのときは歩けるのですから不思議ですわ」

静枝の答は、せつかくめぐりあ一々明快だった。まだ聞きたいことが沢山あったが、あまり尋ねては折角巡逢った同胞のはらからことを変に疑うようで悪

いと思ったので、もう一つだけ重大なことを尋ねた。

「あの、『三人の双生児』とお父さまがお書き遺しになった言葉ね、あれはどういう意味でしょうね。あなたと妾とだけでは二人の双生児で、三人ではありませんものネ」

「ええあれはお父さまのユーモアであつたんですわ。つまりお産の褥しとねの上には、お姉さまとあたくしとの二人の嬰児と、それからお産を済ませたばかりのお母アさまと、都合三人で枕を並べて寝ていたのを御覧になつて三人の双生児とお書きになつたんですわ」

「アラいやだ。そんなことだつたの」

妾は、このいままで重大視していた「三人の双生児」の謎が意外も意外、あまりにも明快にスラリと解けたので、滑稽こっけいでもあ

り、気ぬけもして、暫くは笑いが停まらなかつた。実にそんなことであつたのか。妾は今夜はこの新しく見つかつた同胞のために、内輪ながら極めて盛大なお膳を用意するよう、召使に云いつけたのだつた。そして妾はしばらくの間休息するために、自分の居間に入ったのであつた。

そこへチヨロチヨロと人の足音がして人目を憚はばかるようにして、速水女史が入つてきた。そこで妾は、手文庫から二百円の小切手をかいて、謝礼のため女史に贈つた。女史はたいへん悦んだがすぐには部屋を出てゆかなかつた。「アノ失礼でございますが、この前伺つたときとはちがひがしまして、お邸の中に変な男の人がいるようでございますが、あれはどうした仁じんでございましょう」速水

女史は商売柄だけあって、目のつくのも速かった。その不審をうたれた男というのは安宅真一のことだった。彼は妾と始めて話をしたあの日、なかば話半に急病を起して座敷に倒れてしまった。妾は驚いて早速医者を呼んでみたところ、だいぶん衰弱しているから動かしはいけないという診断であった。妾は迷惑なことだったけれど、そうかといつて真一を戸外につきだしたため、門前でたお斃れてしまわれるようなことがあっては困るから、仕方なしに邸のうちに留めおいて、療養をさせることにした。それからこっち一週間あまり経ち、真一はずっと元気づいた。妾の見立てでは、この「ひとでむすめ海盤車娘」はどつちかというと空腹で参っていたといった方が当っていたように思う。この邸でも、男ぎれというものが全くな

いので、妾も不用心だと思つていたところであるし、かたがた真一を邸内にそのままブラブラさせて置いたのが、逸いちはや早く速水女史の眼に止つたというわけである。妾はそのいきさつを手短に女史に語つて聞かせた。

「まあそうなんでございますか」

と女史はいつたがそこで一段と眉をしか擡めて、

「でもあの安宅さんとやらはどうも人相がよくございませぬわ。

お気をおつけ遊ばせ。これはあたくしの経験から申すことでございますよ」

女史はそういう置いて、なお心配そうに妾の顔をふりかえりながら帰つていった。

それから三日間というものは、妾の邸のなかは主賓しゅひんの静枝と、飛び入りの安宅真一とを加えてたいへん朗かな生活を送った。真一は別人のように元気に見えた。しかし彼の青白いねっとりした皮膚や、怪しい光のある眼つきなどは別に消散する様子もなく、どつちかといえば更に一層ピチピチした爬虫類はちゆうるいになつたような気がするほどであつた。

それに引きかえ、実に妾はこの四五日なんとなく肩の凝りこが鬱う積つせきしたようで、唯に気持がわるくて仕方がなかつた。考えてみるのに、それは静枝が来てからこつちの緩めようのない緊張のせいであろう。それから妾は静枝の対等の地位や静枝を帰すときに頒わけ与えたいと思う金のことも気を使いすぎた。

妾はこの肩の凝りをどうかして早く取りのぞきたいと思った。どうすればそれは簡単にとることが出来るだろうか

そうだ、いいことがある。

妾はとても素晴らしい遊戯を思いついた。それはなによりも、妾の居間に真一を呼ぶことであつた。

「なんか御用ですか」

彼はイソイソと室に入ってきた。

「真ちゃん。貴方に少し命令したいことがあるのよ。きつと従うでしょう」

「命令ですつて。……ええようござんすよ」

「いいのネ、きつとよ。——」

と駄目を押し置いて、妾は秘めて置いた思惑をうちあけた。

それはこの肩の凝りを癒すために今夜妾の室にきて妾だけにあの「海盤車娘」の舞踊を見せて貰いたいということだった。それを聞いた真一は、ちよつと愕きの色を見せたが、やがて、ニツコリ笑つて肯うなずいた。どうやら彼は妾の胸の中にある全てのプログラムを知らぬ様だった。妾の全身は、急に滾こんこん々と精力の泉が湧きだしてきたように思えて肩の凝りも半分ぐらいははやどこかへ吹き飛んでしまった。

「ねえ奥さん」

と真一はすこし改まった調子で妾に呼びかけた。

「あの静枝さんという女は、ありや本当は何なんです」

「オヤ早もう目をつけているの、ホホホホ」

妾はそこで彼女が妾の探していた双生児の一人らしいこと、又速水女史の手で探しだされたことなどを詳しく話した。

「へえそうですか」

と彼は軽蔑したような口調でいった。

「そりや奥さん、おおでたらめ大出鱈目ですよ」

「出鱈目だって」

「そうです、みんな嘘つ八ですよ。こうなれば皆申上げてしまえますがネ、あの女は暫く僕と同座していたことがあるのです。やつぱり銀平の一団でしたよ。お八重というのが本名で、表向きは蛇使いですよ」

「人違いじゃない？　速水さんの調べが済んでるのよ」

「いまに尻尾しっぽを出すから見ていてごらんなさい。第一年齡が物を

云いますよ。あの女は申まをす年としなんで、今年はやつと二十一です。

奥うまさんは午の二十三でしょう。それでいて二人が双生児というのは変じやありませんか。ま、御用心、御用心ですよ」

そういつて真一は立ち去った。妾は彼の話を俄かに信ずることは出来なかつた。明日、速水女史に聞いてみよう。とにかく今日は考える力のない妾だったから。

その夜を妾はどんなにか待ちかねた。今夜真一が妾の室で素晴らしい海盤車娘の踊りを見せてくれることだろうと。

その夜に入ると、幸にも静枝は外出の支度をして妾のところへ

現れた。これから約束があるので速水女史のところへ行ってくる
といつて、そのまま出かけた。

首尾は極ごくじよう上じやうだった。自室の方はすっかり妾の手で準備が整
った。そこで妾は決心をして、真一を呼びにいった。彼は呼ぶと
すぐ部屋から現れた。そして子供っぽい顔を照れくさそうに赧あか
染めて、長い廊下を妾について来た。妾は海盤車娘踊の舞台を、
いつも寝室にしている離れの寮に選んだのだった。

そのとき、廊下にバタバタと跫あしおと音がして、お手伝いさんのキ
ヨが飛ぶように走ってきた。

「あ、奥さま。お客様がお見えになりました」

「お客様？ 誰なの」

せつかく楽しみのところへ、お客様の御入来は迷惑だった。なるべく追いかえすことにしたいと思つた。

「お若い紳士の方ですが、お名前を伺いましたところ、奥さまに逢えばわかると仰おっしや有るのです」

「名前を伺わなければ、あたしが困りますといつて伺つて来なさい」

「ハア、でございますが、その方……」

といつてキヨは目を円くしてまるみせながら、

「殿方でございますが、とつてもお奥さまによく似ていらつしやいますの。殿方と御婦人との違いがあるだけで、まるで引写しでごございますわ」

妾はギクリとした。自分にそんなによく似ている男の人て誰のことだろう。妾はちよつと気懸りになった。

「じゃあ真さん、先へ入って待っててちようだい。しかし何を見ても出て来ちや駄目よ」

「ははア、なんですか。じゃお先へ入っていますよ」

妾は部屋の鍵を明けると、真一を中へ押しやった。そして入口の扉を引くとそのまま廊下へ引返して、キヨの後を追った。キヨは先に立って御玄関へ出た。

「アラ、どうしたの」

妾は御玄関でキヨロキヨロしているキヨの肩を叩いた。

「まあ変でございますわねえ。いままでここに立っていらつしや

いましたのですけれど、どこへお出でになったのか、姿が見えませんでしたわ」

「まあ、いやーね」

妾はすこし腹が立って、今夜は逢わないといえと云いつけて、すぐさま真一の待っている離れの間へ引返した。

「真さま、お待ち遠さま」

重い扉をあけて、中へ入ったが、どうしたものか真一は返事をしなかった。たぬきねいり狸寝入かしらと一步、室内に踏みこんだ妾はそこでハツと胸を衝つかれたようになって棒立ちになった。

「まあ、——」

当の真一は蒲団の側に長くなって斃れていた。顔色は紫色を呈

して四肢はかなり冷えていた。心臓は鼓動の音が聞えず、もうすっかり絶命しているようであった。その枕もとに水を呑んだらしいコップが畳の上にゴロンと転がっていた。

意外な、そして突然の、「海盤車娘」の死だった！

自殺か、他殺？ 他殺ならば一体誰が殺したのであろう？

5

妾は「海盤車娘」ひとでむすめの真一がもう死に切っていると知ると、あま

りのことに頭脳がブーツとしてしまった。さしあたり先ず何を考
え何から手をつけてよいのやら、まるで考えが纏まとまらない。唯空し
く真一の屍体を眺めているばかりだった。

そのうちに少し気が落着いてきた妾は、

「医者だ！ 早く医者と呼ばねばいけない！」

ということに気がついた。そして立ち上った。医者ならばこの
男を或いは助けられるかもしれない——と、始めは思ったものの、
しかしもしもこの真一がこのまま生き返らなかつたらどうなるの
だろうと、それが俄かに気懸りになった。この男は妾の寢室で死
んでいるのだ。ああ、そして——今この寢室の中には、他人に見
せたくないものがいろいろ用意せられてあるのだった。そのよう

なものを若し^も他人に発見されたらば、どんなことになるであろう。若い未亡人がそのような秘密の慰安を持っているのは無理ならぬことだと善意に解釈してくれる人ばかりならいいが、そんな人は十人に一人あるかなしであろう。悪くすれば、そんなことから妾の行状を誤解して、なにか妾が真一の死に関係があるようなことを云いだすかも知れない。そんなことがあつては大変である。妾は医者と呼ぶのをちよつと見合わせて、それより前に、この部屋を整頓することに決心した。

妾は、そこらに転がっているものや、押入れの中にある怪しげなものなどを、大急ぎですつかりトランクにつめ、別室へ持つてゆく用意をした。でも真一の死体の方は、寝具にそのまま手をつ

けずに放置し、疑惑を蒙こうむることのないようにした。結局他人が見たとき、この離座敷は妾の寢室として用意したものではなく、真一の寢室として用意されてあつたように信じさせねばならぬと思つた。

それから妾は部屋を飛びだした。そしてお手伝いさんのキヨの部屋へ行つて、

「キヨ。大変なことになつたから、ちよつと、来ておくれ……」
というときヨは縫物を抛ほうりだして、

「えッ、大変でございますつて……。ま、何が大変なのでござい
ますか……」

妾は手短に、いま真一が離座敷で死んでいることを述べ、医者

を迎えるまでに片づけておきたいものがあるからちよつと手をお貸しといつてキヨを引張つていった。

「キヨ、いいかい。知れるとうるさいから此^{このへや}室からトランクだのを搬^{はこ}んだことは、誰にも云つちやいけないよ。いいかい」

と妾は念入りな注意をすることを忘れなかつた。キヨは黙つて頭を振つて同意を示すだけでいつものようにハッキリと返事をしなかつた。どうやら真一ののけぞつた屍^{したい}体を見てから、すつかり恐怖に囚われてしまったものらしい。

丁度そのときのことであつた。ジジーンと、突然玄関のベルが鳴つた。折が折とて妾は胸を衝^つれたようにハツとし、持ちあげていた荷物をドスンと廊下へ落してしまつた。

「呀あッ。キヨ、入れちやあいけないよ。入れちやあいけないよ……」

誰だろう？

警官だろうか。妾の胸は早鐘のように躍った。

ジジーン。ベルは再びけたたましく鳴った——もうお仕舞しまいだ
と思った。

「もしもし西村さん。もうお寝み？ あたくし速水なんですけれど」

ああ、速水、——なるほど女探偵の速水春子女史の声に違いなかった。ああ、丁度いいところへ、いい人が来てくれたものである。妾は早速さっそく女史を家の中に招じ入れた。

「あら奥さま、すみませんです」

といつになく上ずった調子で

「静枝さま、いらっしやいますか、一緒に出かけるお約束だったんですが、お出にならぬのでお迎えに伺ったんですけれど……」

と女史は云った。ああ、静枝はどうしたのだろう。女史を訪ねてゆくといったが、これは行き違いになったものらしい。

「まあ皆さん、どうかなすったの。……お顔の色つちや無いですわ」

突然女史はそういつて妾とキヨの顔を見較べた。もういけない。もう隠して置くことは出来なかつた。咄嗟とつさに妾の決心は定まつた。

「速水さん、ちよつと上つて下さいな。実は大変なことが出来ち

やつて……」

と妾は速水女史の手を取るようになして上にあげた。そこで女史に、この突発事件について、差支えのない範囲の説明をして、善後策を相談した。

「これは厄介なことになりましたのネ」

と女史は現場を検分しながら沈痛な面持をして云った。

「奥さんは、真一さんの死因が何であるとお思いなんでしょうか」

さあそれは妾の知ることはなかった。頓死かもしれないと思うが、同時に他殺でないと証明する材料もないのだ。それよりも妾には真一がここで死んでいることが迷惑千万であったのである。

——妾は偽りなくその心境を語った。

「これは奥さまの想像していらつしやるよりも面倒なことになると存じますわ。お世辞のないところ、奥さまの立場は非常に不利でございますわ。お分りでしようけれど。ことにこの部屋から物を持ちだして証^{しょう}抛^{いんめつ}湮滅を凶ろうとなさっていますし（といって廊下のトランクのことを指し）その上に真一さんが横^{よこ}わつてゐる寝具は誰が見ても奥さまの寝具に違いありませんし、それからこの部屋に焚^たきこめられた此のいやらしい挑発的な香氣といい……」

「ああ、もうよして下さい」

と妾は女史の言葉を遮^{さえぎ}った。彼女は何もかも知っているのだ。

この上妾は黙って聴いているにたえなかつた。たとえ妾に恐ろしい殺意がなかつたにしろそれを証明することは面倒なことだし、それに妾が寢室へ曲馬きよくばだんくず団崩れの若い男を引入れたことが世間に曝露しては、妾の生活は滅茶滅茶になることがハッキリ分つていた。それは自分を墓穴に埋めるに等しかつた。どうして堪えられよう。

「速水さん。お願いですから、智恵を借して下さい。十分恩に着ますわ」

「さあ——わたくしも奥さまを絞首台にのぼらすことも、また社会的に葬ることも、あまり好まないでございしますが——」

と女史は意地悪いまでの落着きを見せて、

「でも困りましたねえ——」

「お礼なら十分しますわ」

「いや、銭金で片づかないことでございます」

と突っぱねて、

「といつてこのままでは絞首台の縄が近づいてくるばかりで……」

ああ、そうですわ、仕方ありませんから、妾の親しい医師の金田氏を呼びましょう。彼に頼みましてこの場をあつさり死亡診断させてしましましょう」

この女史の提案を受けて妾はああ助かったとホツと息をついた。この場がうまく治まりさえすればいい。真一の屍体が火葬炉の中で灰になってくれさえすればそれで万事治まる。妾は女史に謝意

を表して早速その金田医師を呼んでくるように頼んだ。女史は別人のように快く引受けると、すぐその手配をしてくれた。

やがて金田医師というのが、駈けつけてくれた。彼は真一を申し訳に診ただけで、

「心臓麻痺——ですな。永らく心臓病で寝ていたということにして置きますから……」

と、いつて、その旨をすぐに死亡診断書に認したためてくれた。

「ああ助かった——」

と妾はそこで始めて胸を撫で下したのであった。

それが済むと、金田医師は手馴れた調子で屍体をアルコールで拭ったり脱脂綿を詰めたりして一通りの処置をした。速水女史

もクルクル立ち廻つてその辺を片づけてくれた。そして枕許にあつた冷水の壇びんなどは、わざわざ持つていって下水に流し、中を綺麗に洗つてもつて来るなどと、実にまめに立ち働いた。妾はそれ等をただ呆然と見つめてゐるばかりだった。

丁度そこへ、静枝が外から歸つてきた。彼女は玄関を上ると、今まで速水女史の家で、女史が再び歸つてくるかと待ち合わせていたものの、待ち倦あぐんで引返してきたのだと声高に述べたていたが、真一の突然の死をお手伝いさんから聞くと、驚いて離座敷に駈けつけてきた。その顔は真青だった。

妾の気がすこし落着いたのは、それから十日ほど経ったのちのことだった。

真一の屍体は納棺して密かに火葬場へ送つて焼いた。その遺骨はお寺へ預けてしまった。ささやかなる初七日の法要もすんで、やつと妾は以前の気持を取りかえしたのだった。

あれほど気にかかっていた「三人の双生児」の謎も、解けない儘ままに、そう気にならなかつた。それよりも突然に死んだ真一の死因を早く知りたかつた。

真一は病氣のために頓死したのであるか。いやいやあのよう
に元気だった彼が頓死するようなことはない。それよりも問題は
彼の枕頭に転がっていた空のコップのことだ。コップで当り前に
嘔のんだものなら、盆の上に戻されていなければならぬと思うの
に、コップが空になって畳の上に転がっていたのは可怪しい。コ
ップから水を嘔おんで、下に置こうというときに異変が起つてコッ
プを手から墜おとしたら、ああもなるのではないかと想像される。
ではその異変というのは何であろう？ それは嘔おみ下した水の中
に、なにか毒物が入っていたというような訳なのではあるまいか。
仮りにそれが本当であつたとしたらば、その水瓶の中の毒物は
一体誰が投げこんだものであろうか。その恐ろしい犯人は誰なの

であろうか。誰が真一を殺さねばならない特殊の事情を持つていたのだろうか。

まさか妾の全然知らない人物が入りこんで殺していったとは考えられない。どうしても犯人はわが家に入出入りする人物の中にあるのだと思う。その点では、彼が曲馬団時代に怨恨を残して来た者がわが家に忍びよつて殺したとも思われない。ただ、曲馬団というので思い出したが、あの静枝はその例外だと思う。

静枝！ 静枝！

そうだ静枝が殺したのではなからうか。静枝のことは、速水女史の調べで妾のはらからということが判明したことになっているが、真一から聞きいたところによると、元同じ銀平の曲馬団にいた

お八重という蛇使いだという話であった。彼女の秘密が古い馴染の真一の口から洩れそうだと知ると、これは殺しかねないことだろうと思われた。だがそれをハツキリ云うには、それほど確かな証拠が揃っていない。それに真逆^{まさか}あのような優しい静枝がと思うが、これは一つ確かめてみる必要があると思つた。

「真一を殺したのは、誰だ？」と。

もう妾は静枝を疑う気はしなかつた。誰か外^{ほか}に真一殺しの真犯人がいなければならぬ。そういえば、あの日気がついたことだが、確かに閉めさせてあつたと思つた奥庭つづきの縁側の雨戸に締りがかかつていなかつた。その奥庭というのは玄関脇の木戸さえ開けばそのまま入って来られるようになっていたのであるから、こ

れはひよつとすると、玄関の方から誰かが密かに縁側へ廻つて来て、あの室内の水瓶に毒を混入した。それを知らないで真一が水瓶からコップに水を注いで嘸み、あのように死んでしまったのではないかと考えた。そうでない、あまりにも不思議な毒物の出現であつたから。

そこに気がついた途端に妾はいままですつかり忘れていたあの夜の重要人物のことを思い出した。それは妾が真一と共に離座敷に入ろうとしたときに、キヨが玄関に来訪を告げに来た未知の紳士のことだつた。キヨの言葉を借りると、その紳士と妾とは、男と女との違いこそあれまるで瓜二つのように似ていたので愕いたということである。その紳士に逢おうとて、妾が玄関に出て行つ

たときには、どうしたものか姿が見えなくなっていた。それから妾はキヨにいろいろ命じたりして、約五分か十分経つて、妾が離座敷に行ったときには、もう真一が斃たおれていたのであった。それから以来、あの妾によく似ているという紳士には逢わないが、彼こそそのような奇術めいたことが出来る立場にあつたのではなからうか。一体あれは誰だつたらう。

そこで妾は勝手の方からキヨを呼びよせて、怪紳士のことを尋ねてみたのであった。

「ああ、あの紳士の方のごとでございますか」

とキヨは俄かに狼ろうばい狽ばいの色を示しながら、

「まあ奥さま、あたくしどういたしましょう。真一さまのごとで

大騒ぎとなりましたので、忘れていましたが、実はあの夜あれからもう一度、あの方にお逢いしたのでございます」

そこで訊ねてみると、妾が寢室へ引取つてからものの五分と経たないうちに、彼の紳士はまた玄関に入つて来たが今夜は逢わないという奥さまのお云付けいひつけを伝えるとそのまま帰つた。しかし自分の名前を名乗りもせず、九月の始めになると、また当地を通るから、そのときに気が向いたら寄ろうなどと云つたそうだ。なんという不可解な紳士だろう。話をきくと、妾に好意を持っているようである、よく考えると行動の上に於て、この位怪しい人物はないと思われる。黙つて殺人をして引取つていったとすると、これは実に大胆不敵な兇漢であるといわなければならぬ。妾を吃く

驚つくりさせるなんて——殺人者として妾の目の前に立って吃驚させるぞという悪党らしい遊戯かも知れない。

ただ腑に落ちないのは、妾にこの上なくよく似ているということである。静枝がよく似ていると自分でも思っているがキヨはそれよりもつとよく似ているという。未知の同胞はらからを探していると公表したけれど、こう後から後へと妾によく似た人物が出て来たのでは、気味がわるくて仕方がない。

妾は、その怪紳士が寄るかもしれないと云い残して置いた九月を迎えるのが、急に恐ろしく感ぜられてきた。

八月も末になって、暑さが大分やわ和らいで来た。

或る日妾は、なんとなく家にいるのが堪えられなくなってブラリと邸を出た。久し振りの散歩について興に乗って、思わずも歩を搬びすぎ、いつの間にか隣村の鎮ちんじゆ守もりの杜の傍に出た。そしてそのとき杜蔭に思いがけなくも、曲馬団の小屋が掛っているのを見て、たいへん奇異の感にうたれたが、近づいてみると、古ぼけたえびちやいろ蝦茶色のどんちよう緞帳に金文字で「銀平曲馬団」と銘がうつてあつたのには、夢かとはかりに驚いた。銀平曲馬団といえは、これは

亡き真一が一座していたという曲馬団と同じ名であった。

そこで妾は、小屋の前へ廻つて中を覗いてみたが、生憎あいにく一座は休演していることが分つた。横手の草地の上には顔色のよくない若衆がいて、前日までの長雨に大湿りの来た筵むしろを何十枚となく乾し並べていたので、妾はそれに声をかけた。そしてこれが紛れまぎもなく銀平の率いる曲馬団に相違ないことを知つたが、丁度幸いにもいま座長の銀平老人は、古ふるのほり幟つづで綴つた継ぎはぎだらけの垂れ幕の向うに茶を飲んでいるということであつたから、妾は思いきつてズカズカと中に這入はいつていった。なるほどそこには浮世の苦勞を嘗なめつくしたというような顔をした小柄の半白の老人が、ただ独りで渋茶を啜すすっていた。

「ナニ、昔むかし咄ばなしを聞きたいというのですかい」

と銀平老人は一向おどろ駭おどろきもせず、

「汚きたなら穢きたならしいが、まあとにかくこつちへお上りなすつて……」
 といつて筵の上へ招じた。

妾の不意の訪問も、この佻わびしい休演中の座長の老人を反かえつて悦ばせたらしい。思いがけなく熱い茶を御馳走になつて、この老人の行い澄ました心境を覗いたような気がして物を言いだすのに氣持がたいへん楽であつた。

「もとこの一座にいたという海盤車娘ひとでむすめを御存知？」

「ああ、海盤車娘かネ。海盤車娘もたくさんいるが、どの娘かネ」

「娘と名はついているが、本当は安宅真一という男なんですが……」

…あの肩のところに傷跡の残っている……」

「ああ、真公のことかネ。あいつはついこの間まで居たが、とうとうずらかりやがった。あつしとしては、これんばかりの小さいときから手がけた惜しい玉だったが……貴女さんはなぜ真公のことを訊きなさるのかネ」

そこで妾は、真一が頼つてきて遂に死んだ話をした後、始め真一が幼いときの身の上ばなしをしたが、何かほかに銀平老人が知っていることはないかと訊ねた。

「ああ、真公の生立ちおいたが知りたいというのだネ。あれは今からザツト十五六年も前、四国の徳島で買った子だったがネ。当時はなんでも八つだといったネ。病身らしい子で、とても育つまいかと

は思ったが、肩のところにある瘤こぶが気に入って買ってしまったの
さ」

「誰から買ったんですの」

「さあ、そいつは誰だったか覚えていないが、とにかく何処の国
にもある人売稼業の男から買った」

「その親は誰なんでしょう」

「さあ、その親おやもと許だが」

と老人は暫く考えていたが、「さあ、後に開演中の客席から大
声をあげて飛び出して来た若い女がいたがネ、それがなんでも生
みの母親とか云っていたが家出している女らしかった。父親とい
うのは徳島の安宅村に住んでいるとか云ったが、その苗みょうじ字は：

…」

と老人は首を曲げて思い出そうと努めているらしかった。妾は銀平老人の話聞いてるうちに真一の語った身の上が想像していたよりも正確であり、妾にとって実に興味のある話であることが分った。

「苗字は安宅というのじゃありませんの」

「イヤ安宅は後になつてあつしがつけてやった名前だよ。真公の生れた村の名だからいいと思つたのでネ。さて、本当の苗字はちよつと忘れちまつたネ。なんしろ古いことでもありあまり覚える心算もなかつたのでね。ひよつとすると、こうり梱の底に何か書附けとなつて残つてゐるかもしれない」

妾は老人に十分のお礼をするから、その書附を探してくれよう
うに頼んだ。妾はそれから、蛇使いのお八重という女を知ってい
るかと思ねた。

「ああお八重かね。あいつも先頃までいたが、可哀想なことをし
たよ」

「可哀想なことというと……」

「なに、あの女は真公に惚ほれてやがったが、真公が居なくなると
気が変になってしまって、鳴門なるとの渦の中へ飛びこんでしまったよ」

「まあ、誰か飛びこむところを見たんですの」

「見たというわけじゃないが、岩頭に草履ぞうりやいつも生命よりも大
事ことにしていた頭飾りのものなどを並べてあったのを見つけたんだ。

それから小屋の中からは、皆に当てた遺書が出て来たが、世を果敢かなんで死ぬると、美しい文字で連つらねてあった。あの子は仲間の噂じや、女学校に上つていたことがあるらしいネ」

「死骸は上つてきたんでしようか」

「さあ、どうかネ。——なにしろあつし達は旅たびがらす鴉しゅっぽんのことであ

り、そうそう同じ土地にいつまでゴロゴロして、出しゅっぽん奔ぽんした奴

のことを考えている違いとまがないのでネ。それと鳴門の渦に飛びこめば、まあ死骸の出ることなんざ無いと思つた方がいくらいだよ」

この話では、蛇つかいのお八重はインテリ女らしい。すると、

やはりあの静枝はこの蛇つかいのお八重なのであろうか。そこで

妾は彼女の素すじょう性を訊ねたが、あの娘は二年ほど前に突然一座に

転げこんで来たので、前身は知らないと言った。老人は答えた。またそのお八重が申年まゝとしかどうかも知らなかった。

妾は、果して静枝が蛇使いのお八重であるか、どうかと思つて、それとなく、お八重の容貌などについて尋ねてみたが、聞いていた銀平は大きく肯き、

「そういえば、お前さんをどこかで見たような仁じんだと思つていたが、なるほどお前さんはお八重に似ているところがあるネ。お前さんはその姉さんか身内でもあるのかい」

と云つてシゲシゲと妾の顔を見た。妾は真逆まぎかそんなことがネと、軽く打消した。だが、静枝はお八重に違ひない気がする。恐らく彼女は一座と縁を切るために、殊ことさら更自殺したらしく見せかけた

ものであろう。そこには智恵袋の速水女史が采配を振つただらうことが想像されるのであつた。でも彼女の前身が分つていないのでは、どうにも仕方がなかつた。疑うなれば、なにか別の手段によつて、ハッキリした証拠を探すより外はなかつた。ただ静枝が真一に恋をしていたということは初耳だつた。一方真一は静枝を愛していたのだろうか。そう思うと、妾の全身はカツと熱くなつてきた。

思い起してみると、真一が静枝の前身を告げたときも、どつちかというと静枝を軽蔑しているようであつたから、これは真一が慕われる方であつたとしても、慕う方ではなかつたと思われる。妾は僅かに気を持ち直した。

どうも分らないのは妾と兩人の血の關係だった。静枝はあの三つの赤いカンカンを結ゆつて座敷牢にいた妹らしいと思うのに、一方真一の身の上が妾の幼時と非常に似かよったところがあり、ことに家出をした妾たちの母が曲馬団の舞台にいる真一に声をかけたらしいことから考えると、真一も亦また、真実に妾の同胞はらかららしい気がした。一体どっちが本当の同胞なんだろう。

「イヤ真一と静枝との二人とも、妾の同胞なのではあるまいか」と、不ふ図とそんな疑惑が浮んできた。ああ、そんなことがあつていいであろうか。もし妾たちが同胞だったとしたら、これはなんという浅ましいことだろう。妾はまだいいとして、静枝と真一とはどうであろう。二人の關係は到底妾の知ることを許さなかつた

が、もしや曲馬団からこつちに何かあるのではなからうか。もしあつたとしたら……妾はペツと唾を吐きたくなつた。

ただ慰めは、真一の容貌が、妾や静枝とは大分違つてゐることであつた。ハッキリ似てゐると考えられるのは月の輪がたの眉毛と、腫^はれぼつたい眼瞼とだけで、外はそれほど似てゐなかつた。

たとえ二卵性の双生児としても、それはあまりにも似合わしからぬところであつた。すると真一は境遇の上では妾の同胞に相当してゐながら、身体の上の印からはどうしても他人染^じみていた。この不可解な問題は父が書きのこした「呪ワレテアレ、三人ノ双生児！」の謎をときさえすればすべてが氷解することと思う。どうしても妾は、静枝の云うように、彼女と産^{さんじよく}褥にある母とを加

えて、父が三人の双生児と洒落らしいことを云つたなどとは考えない。

話によると、体の一部が接が^{つな}つた双生児を、そこるところから切り離して、全く独り立ちの二人の人間にした手術の話もあることだから、これはひよつとすると、妻の身体の一部に、そんな恐ろしい切開の痕があるのではないかと、今までに考えてみたこともないような恐ろしい疑惑が浮び上つて、それは嵐の前の旋風に乗った黒雲のように拡がってゆき、遂に妾は居ても立つてもいられない焦躁の念に包まれてしまった。誰がそんな恐ろしい疑惑をもつて、自分の裸身の隅から隅まで調べてみた者があるうか。第一、自分ではどうしても十分に観察の出来ない身体の一部が有る

ではないかと思うと、妾の心臓は俄かに激しい動悸どうきに襲われたのであった。

8

そのような悩みに、独り苦悶くもんしているその最中に、妾はまた一つの大きな愕きを迎えなければならなかった。

「ああ、奥様。お客さまでございませすが……」

とキヨが顔色を変えて妾の居間に駆けつけた。

「まあどうしたのよオ。お客さまって、誰れ？」

「それが奥さま、いつか夜分にいらつして、名前も云わずにお帰りになった若い紳士の方でございますよ。忘れもしません、あれは真さまがお亡くなりになった晩でございましたわ」

「えッ、あの晩の人が！」

妾はハツと駭おどろいた。妾によく似ているという紳士のことなのだ。あんなことを云い置いていったが、二度と来るものかと思つていた。妾は未だにその紳士が、真一を殺害したのではないかとさえ思つている位だ。その怪しい紳士が、チャンと予告どおりに訪ねてきたというのだ。悪人であろうか。善人であろうか。ちかごろ驚きやすくなつた妾は、もうワクワクとして何の考えも纏らなか

った。

「お会いするわ。また帰ってしまったされると気味が悪いから、早く客間の方へ上げてよ」

妾に似ているというところを、僅かに安心の足掛りとして、思い切つて会つてみることにした。さあ、どんな男だろうか。一目見て心臓が凍つてしまいそうでもあり、また早く覗いてみたいようでもあり……。

「妾が主人の珠枝でございます——」

頃合を計つて客間へ這入^{はい}つていった妾は、客という背広の紳士の背中に声をかけた。

「いやア——」

と紳士は、居住いを直しながら、こつちを振り向いた。ああ、その顔——まあ、なんてよく似ている人もあればあるものだろう——と、妾は驚くというよりも感心してしまった。

「ああ確かに貴女だ。こんなによく似ているとは思わなかった。ああ僕は満足です——」

と向うでも容貌の似通っていたことに驚歎して、たて続けに叫びつづけた。

「アノ、失礼でございますが、貴方は誰方どなたさまでいらつしやいませうか」

「ああ、僕ですか。イヤどうも余りに驚いてしまった、名乗るところを忘れて申訳ありません」

と云いながら、紳士はチョッキのポケットから一葉の名刺を抜いて、妾の前に差出した。

「僕はこういう者です。姓の方に何か御記憶がありませんでしょうか」

その名刺の表には、

「南八丈島医学研究所、医学博士赤沢あかざわ貞雄さだお」

とあって、隅の方に「東京府八丈島庁管下」と記してあった。するとこの紳士は赤沢貞雄と名乗る人である。赤沢という姓？

ああ赤沢といえば……。

「赤沢というと徳島の安宅の……」

「そうです。よく覚えていましたネ。僕は赤沢常造の息子なんで

すが、父だの僕だのを覚えていらつしやいますか」

妾は突然故郷のことを云いだされて、ボーツとなつてしまった。しかし赤沢の伯父のことは、何で忘れよう。いつもその伯父は、わが家へ繁く来たではないか。貞雄——という名にも、なるほどそういわれると覚えがあつた。伯父のうちに、自分と同じ年の少年がいて遊んだことを思い出した。あれがこの紳士なのであろうか。当時貞雄さんはまだ五六歳の幼童で膝までしかないうぐいすいろ鶯色わきのセルの着物を着た脆弱そうな少年だった。彼はいつも寒そうに、両手を腋わきの下から着物の中にさし入れて、やや羞含はにかんで歩いてたのを思い出した。

「まあ貞雄さんでしたの。大きくなられて——妾すつかりお見外みそ

れをいたしましたわ」

貞雄は笑いながら、この前は、妾の家を探すのにたいへん手間どってやつとこの家を探しあてたので、待たせてあった円タクを帰すために一度出て行って間もなく引返してくると、お手伝いさんから面会を断られてしまったので、たいへん面喰らったこと、そのとき北海道の大学へ打合わせにゆく途中だったので、また帰り路に寄ればいいと思つてそう云い残してさようならをしたことなどを語つた。それを聞いていた妾は、あの夜の心境を想い出して、穴あらば入りたいと思つたことであつた。

「でも、どうして名前を云つて下さらなかつたの。赤沢と仰おっしゃ有れば、妾必ず出ていったと思つたわ」

「イヤそれはネ。貴女に会って驚かせたかったのさ」

というわけで、二人は直ぐ幼馴染の昔にかえって、打ち融けた。妾は近頃うち続く不安が、貞雄の不意の来訪によって大半拭い去られたように感じたのだった。

聞けば貞雄も、妾と同じように二十三歳だということだった。

彼はどうやら秀才中の秀才らしく本年学校を出ると、在学中からの研究事項だったものを一層研究するつもりで、断然南八丈島研究所へ赴任したのだった。何の研究であるのかを訊ねたところ、「ちよつと説明しても分らんなア。まア遺伝学みたいなものだが、今までのようなものではない。……イヤもうよしましう。それよか今日は御馳走でもして貰って、昔話でもしたいネ」

「ええ、御馳走してよ。そして是非泊っていつて下さいネ。昔話を沢山したいわ。妾もいろいろ伺いたいことがあるのよ」

丁度、妹の静枝は、少し身体を壊している女探偵速水女史に付き添わせて、奥伊豆の温泉にやってあるので、家の中はキヨと二人切りだったので、貞雄を泊らせるには一向差支えなかった。

「いや泊ることだけは断る。僕はこれで、ひとの家にお客なんかになっては中々睡れない性分なのでネ。それにチャンとホテルに部屋をとつてあるのだから、心配はいらないよ」

「いいから、ぜひお泊りなさいよ」

「いやいや断る。——」

小さいときもこんな性分だったが、とにかく今の貞雄は学者だ

けあつてなかなか頑固であつた。妾は近くから珍らしい料理を狩りあつめて貞雄を饗きようおう 応しながら、この機会に妾の悩みを打ちあけて、力になつて貰おうと思つた。

まず妾は貞雄に向い、あの立葵の咲く家の座敷牢の中に寝ていた妾の同胞はらからを探したいという氣になつて新聞広告をしたことから始めて、静枝や真一などが現れるに至つたまでの話を詳しくして、もしや彼が、妾の同胞を知らないかと尋ねた。

「どうも小さい折のことで、僕はよく覚えていないけれど、いつか夜、父が子供を連れて来たことを覚えている。僕はその顔のみたわけではないが、二階に上げた子供がヒイヒイと泣いているのを聞きつけた。それが君のいう座敷牢の中にいた同胞だろうと思

うが、泣き声から想像すると、二人のようでもあったがネ」

「ええなんですって、連れられていったのは二人だったんですって、まア、——」

妾は想像していたところと、まるで、違つてきたので、呆然としてしまった。向うが二人だとすると、妾を入れて三人になるではないか。すると双生児と称^よぶのはいかなものであろう。それを貞雄に云つてみると、

「幼いときのことだから、ハッキリしたことが分らないんだ。それに父の常造も先年死んでしまつたし、母はもつと前に死んでいった。今、安宅村へ行つても、その夜のことや、君の同胞の秘密について知っている人は一人もあるまい」

「そうでしょか。——」

妾はガツカリしてしまった。その様子を見ていた貞雄は気の毒に思ったのであろう。すこし嚴げんとした声で、

「でも君の知りたいと思つてゐることは、絶対に分らないというわけではあるまい。つまりそれは学問の力によることだ。もし君が欲するならば、僕はいかなる手段によつてもその答を探し出してあげようと思う。そう氣を落したものでもないよ」

「分る方法があれば、どんなことをしてでも探しだしていただきたいわ。妾、これが分らないと死んでも死に切れないと思うのよ」と妾は切せつなる願いを洩らした。それは自ひとりに妾の口を迸ほとばしり出でた言葉だったけれど、このとき云つた、（どんなことをしてでも探

しだしていただきたいわ」という言葉が、後になってまさか大變な妾への重荷になろうとは露ほども気がつかなかった。それがどんなに恐ろしい重荷となったかは、この物語の進んでゆくに連れ、だんだんと明白になってくることであろう。

「でも可笑おかしいわネ。女探偵の速水さんは、徳島へ行つて、静枝という妹を探して来たのよ。安宅へ行つたところ何もかも苦もな
く分つたようなことを云つてたけれど……」

というと、貞雄は首を振つて、

「どうもその女探偵というのが怪し気だネ。これから一度行つてみると分るだろうが、いまそんなに簡単に分る筈はないと思う。それから『海盤車娘』の真一君の死因だが、これなどは随分不審

な点があるネ。たとえば速水女史が水壇の水を早速明けに行つたというのも妙なことじゃないかね。どうだい珠枝さん。その壇とかコップとか、或いは水の零れを拭ぬぐつた雑ぞうきん巾とかいうものは残つていないかしら」

貞雄が抱いている疑惑の点を、妾はすぐに察することが出来た。彼は真一の死を中毒死だと思つているのだ。それは貞雄があ部屋の中で口にしたと思われるその水壇の中に一切の秘密があると云うらしい。

「そんなものは、その場で始末してしまつたから、有る筈はなくてよ」と云つたものの、よく考えてみると、妾はあの夜離座敷を大急ぎで片づけたことを思い出した。あのととき部屋の中の品物を

仕舞ったトランク類はその儘まま土蔵の奥深く隠してしまつて、その後一度も開いたことがないのであつたが、ひよつとするとそのトランクの中に、なにか当時の隠れた事実を証明するようなものが入っていないとも云えないと思う。そう考えた妾は、恥かしいけれど一切のことを貞雄の前にさらけだした。

「ああそんなものがあるのなら、一度出して調べてみたらどうだね」

流石さすがに医者である彼は、変態的な妾の生活など嗤わらう様子もなく、真面目に聞いて呉れたのだった。だから妾はすぐさまそのトランクを開いてみる決心をして、貞雄を案内して黴かびくさ臭い土蔵の中に入つていったのであつた。

貞雄の云ったことは正に凶星^{ずぼし}だった。

妾たちはトランクを一つ一つ開いてゆくうちに、その一つの中に、あの夜真一が水を飲むに使った大きいコップを発見した。それは狼狽^{ろうばい}のあまり妾が他の品物と一緒に抛りこんでしまったものに違いなかった。

貞雄は、そのコップを取り上げて、明りの方に透かしてみたり、

ちよつと臭を嗅いでみたりしていたが、やがて妾の方を向き、

「珠枝さん、ハッキリは分らないが、どうやらこれは砒素ひそが入っていたような形跡がある。無水亜砒酸むすいあひさんに或る処理を施すと、まず水のようなものに溶けた形になるが、こいつは猛毒をもっている。普通なら飲むとしても気がつく筈だが、当人が酒に酔っているかなにかすれば、気がつかないで飲んでしまうだろう。砒素は簡単に検出できるから、あとで検べてみよう。しかしまず間違いないと思うネ」

「まア、水瓶の中に砒素が入っていたの、まア恐ろしいこと。一体誰がそんなものを入れたのでしょうか」

「いや、今に僕が分らせてみるよ」

妾はホツと息をついた。貞雄の来てくれたお蔭で、妾の疑問と
していたところはドンドン氷解してゆくのであつたから、感謝を
せずにいられなかつた。どうか今夜はぜひ泊つてくれといつたけ
れど、貞雄は中々承知しなかつた。

「随分貴方は頑固なのネ。貴方と妾とは従いとこ兄妹じゃありませんか。
泊つていったつて何ともないじゃないの」

「ああ。——」

と貞雄はちよつと眉をひそめたが、

「貴女は知らないらしいネ。貴女の西村家と、僕の赤沢家とは、
赤の他人なんだよ」

「あら、——でも赤沢の伯父さんと呼んでいたことを覚えている

わ」

「ははア、そんなこと、意味ないよ。幼いころは、だれを見ても『おじさん』と呼ぶ。僕は知っているけれど、両家は他人同志だった」

「まあ、そうなの——」

すると妾にとつて、赤沢は赤の他人なのだ。今まで馴れ馴れしくしたことが悔いられたけれど、その代り他人であればあるだけ、妾は俄かに胸のワクワクするのを覚えた。

「医者として僕は珠枝さんに云つて置きたいけれどネ」と貞雄は一向頓着なしに話しかけた。「君は同胞はらからを探すことに夢中になっているようだが、たといそれを探し当てても、君はサツパリしな

いに決っているよ」

「アラなぜ、そうなの」

妾は貞雄が何を云いだすのやら、すこし驚かされた。

「君は、そうした要求の背後に、いかなる本尊ほんぞんさまがあるのかを知らねば駄目だ」

「本尊さまって？」

「端的たんてきに云えば、君は母性慾に燃えているのだ。君の自分の血を分けた子孫を残したがっているのだということに気がつかないかね。同胞探しは、その根本的要求が別の形になって現れたに過ぎない。本当のところは、君は子供を生みたいのだ」

「そうかも知れないわ」と妾は云った。「でも妾は男性とそっ

う原因を作ることをごまさないのよ。つまりそういう交渉を極端に億劫おつくうがる性質なの。そういう交渉なしに子供が出来るんだったらいいけれども、それもゆかないでしょう。それに妾は一度結婚生活を送って分ったことだけれど、妾には子供が出来の見込なんかありやしないわ」

「そんなこともなからうけれど、結局君のあまりに変態的な生活が、そうした能力を奪ってしまったのかもしれないネ。忍耐づよい夫婦生活が、おそらく自然に君の能力を取り返すだろうと思うが、夫婦生活そのものを極端に忌避きひするようでは困ったものだネ」
と、いつて貞雄は、軽い吐息といきをついた。妾自身でもこれは困ったものだと思つているのである。変態道に陥つたばかりに、妾は正

しい勤めをさえ極端に不潔に思うのだった。

「しかし本当は、君自身子供が欲しいと思うのだネ」

と暫くして貞雄は尋ねた。

「いく度云つても同じことよ。でも不能者に、子供の出来る筈はないわ。その上にどうも妾は生れつき大きな欠陥があるような気がしてしょうがないのよ」

貞雄は気の毒そうな顔つきで、妾をしげしげと見ていた。そのとき妾は、いままで忘れていた大事なことを思い出した。それはいつかも考えたことであるが、ひよつとしたら妾の身体には自分で観察することの出来ない箇所^{箇所}に異常な徴候^{徴候}が印せられているのではあるまいか。それを専門的知識をもって十分に診察してくれ

る適当な医師としては恐らく目の前に居る此の貞雄の外にないということを感じた。それで妾の胸のうちには、それを確めて貰いたい嵐のような願望が捲き起つたのである。

「ねえ、貞雄さん、妾、医師である貴方にとても重大なお願いがあるのよ。——」

「医師である僕に、どんな願いがあるというのかネ」

妾はそこで思いきつて全身に亘るわた診断のことを頼んでみた。一つには異状又は異状の痕跡の有る無しのこと、もう一つには妾の懐胎の機能が健全であるか不健全であるかということ、この二つについて早速調べてくれるように頼んだのであった。

「よろしい。そんなことは訳はないことだ。では明日道具を揃え

て来て、やってあげよう」

といった。妾としては非常に重大なことを、彼があまりに手軽に引受けてくれたことに対して意外の感にうたれたけれど、医師にしてはそんなことは格別なんのこともないのであると思うた。

さて其の夜、貞雄はわが家に一泊を承知しないでホテルに引上げて行った。——そしてその翌朝になると、医療器械のギツシリ詰まっているらしい大きな鞆を下げ、まるで事務員かなにかのようにな正確にやって来た。

「さあ、こういうことは、午前にはやるのがいいのだから、さあ早く支度をして——」

と云つて妾を促した。妾はキヨを用事にかこつけて外出させてしまおうと思つたので、それを命じていると、奥から貞雄がノコノコ出て来て云つた。

「キヨさんを使いにするのなら、アレが済んでからにしてはどうかネ」

この貞雄の言葉には、妾はすっかり興きようを醒さましてしまった。キヨを外に出してしまえば、どんなに落着いて妾の楽しみを味うことが出来るだろうと予期していたのが、すっかり駄目になった。

「キヨが居ては、妾いや厭いやだわ。——」

と妾は、ちよつと拗すねてみせた。

「それはいけない。こういうことは、たとえ医師でも誤解をうけ

やすいことだ。どうしても誰かに立ち会って貰うのでなくては、僕はやらないよ」

貞雄の頑迷な潔癖さには、妾はつくづく呆れてしまった。また一面に於ては、それだけ彼の人物が気に入った。もう仕方ないので、キヨを立ち合わせることに同意した。

貞雄は、妾の居間を診察室に決め、その隣りの納戸を準備室に決めた。準備室には、何に使うのだから訳の分らないいろいろな器械や器具を並べたて、見たところたいへん大袈裟でおおげさかつおごそ厳かだつた。

こうして午前十時から、いよいよキヨ立ち会いのもとに綿密な診察が始まったが、それは約一時間に亘つた。妾はあらゆる場所

をあらゆる角度から診察され、その上にまるで手術を受けるのかと思うような器械を当てられたり、いろいろな場所にさまざまの注射をしたり、幾度も血液を採取せられたりした。妾はキヨの立ち会っていることなど直ぐ気にならなくなった。どうやら診察が一と通り終つたらしいと思つてしていると貞雄は静かに妾の傍へよつて来て、

「これで診察は終つたよ。君は母性欲が今日は顕著な曝露症ばくろししょうの形で現れていたと思う」と笑いもせず云つてのけた。「精くわしいことは、あとで報告するけれど、見たところ君の身体にはさしたる重大な異状を発見しない。子供を育てる機能も充分に発達している。君が考えさえ直すなら、普通の人より以上に健康な体躯の持

ち主だということが出来る」

そんなことは云われなくても分つていようなものだった。それよりも、もつと訊きき正ただしたいことがあつた。

「それよか、妾の身体に、何か変つたところか、癩きず痕あとのようなものは見付からなくて」

「気の毒だけれど、君を悦よろこばせるような異状は何一つ発見できなかつたよ。——」

それを聴いて妾はホツと溜息をついた。それならばいい。妾は心配したようなシャム姉妹的な存在でもないのだつた。妾は一時に身が軽くなつたような気がした。それで起きて何かお美味いしいものでも喰べようと思つて、蒲団から身体を起しかけた。ところが

それを見た貞雄は、おどろ駭いてそれを留めた。

「あツ動いちやいけない。——」

「アラどうして！」

「もう一時間ばかり、そのまま絶対安静にしているんだよ。いろいろな注射などをしたものだから、その反応が恐い。生命が惜し
けりや、僕の云うことを聞いて、もう一時間ほど静かに横臥おうがして
いるのだ」

そういつて貞雄は、妻の肩にソツと毛布を掛けてくれた。——
妻は羊のように温和おとなしくなった。

貞雄が当地を出発したのは、その翌日のことだった。いずれ冬の
休暇ごろには、用があるのでまた当地へ来るから、そのときは是

非立寄ると云った。そして例の「三人の双生児」に関する問題も故郷の方をもっと探してみても、面白い発見があれば必ず知らせるということだった。

妾は彼の再訪を幾度も懇願した上、名残惜しくも貞雄を東京湾の埠頭まで送ったのであった。

10

五ヶ月という日数は、妾にとってあまり永すぎた。——しかし

とうとう、その五ヶ月目がやって来たのだった。

五ヶ月！

その間、妾は貞雄をどんなに待ち侘びたことだろう。堪えかねた妾は幾度も、南八丈島の彼の許へ手紙を出したけれど、それは梨なの礫しつ同様で、返答は一つもなかった。

その五ヶ月の間を、妾はどんなに驚き、焦あせり悶もえたかしのい。前には三人の双生児のことで思い悩んだ妾だったけれど、この度はそれどころではなかった。三人の双生児などは、もうどうでもよかった。ましてや真一の死などは何のことでもなかった。彼を殺した犯人が女探偵の速水女史であつても、また静枝が妾の本当の妹でなくても、それはどうでもよいことだった。事実妾は

平気で、かの二人の女を同居させていた。二人は全く家族のよう
に振舞っていたのである。ときには、誰がこの家の主人だか分ら
ぬようなことさえあつた。その五ヶ月を、妾は一体何事について
驚き焦り悶えていたのだろうか。

妊娠！

妾は目下^{もっか}妊娠五ヶ月なのであつた。

そういうと、きつと誰方^{どなた}でもこの余り意外な出来ごとのために、
目を丸くなさることだろうと思うが、妾の懐^{かいにん}妊は最早疑う余地
のない嚴^{げんぜん}然たる事実なのである。

さらに驚くことは、この懐妊した胎児について、誰がその父親
であるのか、妾には全く見当がつかないことである。妾は全く身

に覚えがないのに、このように妊娠してしまったのである。乳首は黝くろずみ、下腹部は歴然と膨らみ、この節せつではもう胎動をさえ感ずるようになった。婦人科医の診断もうけたが紛れもなく妊娠しているのだった。——相手もないのに身ごもるなどという不思議なことが、今の世にあつてよいものであろうか。

妾は早く貞雄に会つて、このことについて教えをうけたいと思う。彼のような卓越した学者ならねばこの神秘の謎は解けないであらう。日を繰つてみると、妾は彼が身体の健全を保証していつてくれたその直後に受胎したことになるのである。といつて彼は決してその胎児の父ではないと思う。なぜなら貞雄は非常に潔癖で妾の家に一泊することすら断つたほどであり、もちろん妾は一

度たりとも彼を相手にするようなことはなかった。いや貞雄ばかりのことでない。その外の男という男についても同じことが云える。妾は絶対に誓う。妾は男を相手にして、懐妊の原因をつくるような行いをしたことは一度もないのだ。しかし妊娠していることは、どこまでも厳然たる事実なのであった！

妾も驚いているけれど、ひよつとするとともに驚いている人がありはしないかと思う。中でも女探偵の速水女史と、妾の妹の静枝とがはからずもそれを発見したときの驚きといったらなかつた。「まあ驚いてしまいますわねえ。奥さまはどうして妊娠なすつたんですの。相手は何処へその誰でございますの？」

女史は横目で妾のお臍へそのあたりを睨みながら、あたり憚らず驚

きの声を放った。

「まあお姉さま、驚かせるわネ。でもあたくしは存知ぞんじていますわ。あたくし達が伊豆へ行っている間にお作り遊ばしたんでしよう」

静枝も驚きの目を瞠みはつたが、これは嬉しそうな驚きに見えた。

しかし速水女史の方はそれ以来ニコリとも笑わなくなってしまうた。こうなつては、妾の立場というものがいよいよなくなつてしまつたのだつた。

それだけではなかつた。それからというものは女史と静枝とは、暇さえあれば額を合わせて何事かブツブツと口論しあつた。それを耳にするにつけ、妾はたまらなく不愉快になつていった。

ところで妾の待ちに待つたる貞雄が、約束した五ヶ月目にはと

うとう姿を見せず、遂に七ヶ月目となつてまだ肌寒く雪さえ戸外にチラチラしている三月になつてやつと妾の家の玄関に姿を現した。

「貞雄さんが来たつて？」

キヨからその知らせを聞いて、すぐ飛びだしかけたものの、もう七ヶ月目の腹を抱えた妾のことである。妊娠のことは手紙で知らせはしてあつたものの、この醜態を自ら見せにゆくほどの勇気がなかつた。

「ほう、随分見事な腹になつたネ」

と貞雄は真面目な顔をして入つてきた。彼がそんなに取すまじでないかつたら、妾はいきなり怒鳴りつけたかもしれぬ。

「貞雄さん、一体これはどうして下さるの」

と、妾は思う仔細があつて、つつかかつて行つた。

「いや、どうにでもするよ」

と貞雄はさりげなく答えながら、

「今度は君のためいろいろと大きな土産を持って来たよ。どこか静かなところへ行つて、ゆっくり話したいネ」

といつて、例の静かな瞳をジツと妾の顔に据えた。妾にはそれ以上つつかかつてゆく勇氣を持ち合わさなかつた。

彼はその日一日をわが家でブラブラしていたが、妾が何を云つても碌ろくな返事をしなかつた。その代り速水女史に呼ばれると、イソイソと彼女の後についていつて、長い間部屋から出て来なかつ

たりした。彼等はわざと注意をしているらしく二人の声は全く洩れてこなかった。

その翌日になると、貞雄は妾を伴つて外へ出た。そして連れこんだのは、市内の某病院だった。彼はそこで顔の利く方と見えてズンズン通つていった。そして妾を「レントゲン室」と表札の懸つている部屋へ入れて、三十分間あまり、ジイジイとレントゲン線を発生させて、妾の腹部を覗いたり、写真を撮つたりした。その間、彼はまるで人が違つたように無口だった。

それが済むと、彼は始めて微笑を浮かべながら、妾を^{ねぎ}勞らつた。それから再び外へ出て、^{しのばずのいけ}不^い忍^け池を真下に見下ろす、さる静かな料亭の座敷へ連れこんだのだった。いよいよ貞雄は妾に重大なこ

とを云おうとするに違ひなかつた。妾は並べられたお料理なども全く目に入らないほどの緊張を覚えたのだつた。

「珠枝さん——」

と貞雄は静かに呼びかけた。

「貴女は僕に聞きたい色々のことからを持つているだろうネ。イヤ、暫く黙っていてくれたまえ。僕が適当な順序を考えて一応話をするからどうか気を鎮めてよく聞いてくれ給え。——まず真一君を殺した犯人のことだが、それは今日、本人の自白によつてハッキリ分つたよ」

「まあ、誰なのでしょう」

と妾は思わず乗りだした。

「そう興奮しちゃいけない。——その犯人というのは、やはり速水女史だった。静枝さんは無関係だ」

「ああ、速水さんが真ちゃんを殺したの」

「そうなのだ。僕は或る交換条件を提出し、その代償として聞いたんだ。で、その条件というのは、君が腹に持っている胎児を流産させることなのだ。イヤ驚いてはいけない。一体、速水女史は事実君の妹でもなんでもない蛇使いのお八重という女を籠絡ろうらくして、静枝と名乗らせ、この家へ乗り込ませた。それはお八重がたまたま君によく似ていたので使ったままで、そうすることによって君の財産をお八重に継がせ、そこで速水女史は軍師の恩をふきかけて結局莫大な財産を自由にしようという企たくらみをしたのだ。そ

の計画はたいへん巧く行つた。これなら大丈夫と思つていたところ、意外にも意外、君が妊娠してしまつたので、速水は大狼狽だいろうばいを始めたのだ。なぜなら、君に子供が生れりや、一切の財産はその子供が継ぐに決つてゐるからネ。そこでこれはたまらないと悄し気よげてゐるところへ、僕が悪党らしく流産手術を持ちだしたものだからすつかり安心して、真一君を亜砒酸あひさんで殺したことを自白に及んだというわけさ。もちろん想像してゐたとおり、この家に潜伏してゐた女史は、酔つてゐる真一が水を呑むのを見越して、水瓶の中にその毒薬を入れて置いたのだ。女史が事件後、真先まつさきにその水を明けに行つたのも肯うなずかれるネ」

妾はただ呆れて聞いているより外ほかなかつた。

「ところで真一君だが、あれは紛れもなく君の同胞だ。はらから『三人の双生児』の説明は、後で詳しく云うけれど、とにかく亡くなつた君たちの母親は、真一と君とを生んだのに違いない。これは徳島にいんせい隠棲しているその時の産婆の平井お梅というのを探しだして聞きだしたのだ。書いて貰つてきたものもあるから、後でゆつくり見るがいい。ただし、君と真一とは、あのよく似ていて瓜二つという一卵性双生児ではなくて、すこし顔の違つてくる二卵性双生児であつたことは、君にもよく分るだろう。しかしまだその上に、恐ろしい因縁話があるのだ」

と云つて貞雄は茶碗からゴクリと番茶を飲んだ。

「君と真一君が、双生児にしては余り似ていないことを不思議に

思うだろうが、そこに重大な謎が横たわっているのだ。このところをよく分つて貰いたいが、実は君たちは双生児であつて、その卵細胞は同じ母親のものながら、その精虫を供給した父親が違つていたのだ。いいかね、分るだろうか。——つまり、ハツキリ云うと、真一君を生じた精虫は君の亡くなつた父親のものであり、それから君を生じた精虫は、実に僕の父親である赤沢常造のものだつたんだ。さ、そういうと不思議がるかも知れないが、君はこんなことを知っているだろう。膣内の精虫の多くはその日のうちに死んでしまうけれど、中には二週間たつても生存しているものもあるということ。だからここに二卵性の双生児が出来たとしても、それが同一日に発射された精虫によるとは限らないのだ。

そういえばもう分つただろうが、僕の父の赤沢常造の精虫が発射されたその数日か十数日か後に、真一君の父親が船から下りて来てまた精虫を発射する。このとき偶然にも二人の精虫が、君の母親の二つの卵に取りついてこの二卵性双生児が出来上つたのだ。

それで合点がゆくことと思うが、君と僕とが、戸籍の上では赤の他人でありながら、実は二人は父親を同じくする異母兄妹なのだ。だから君と僕とが、兄妹のように似ていることが肯かれるだろう」

妾はあまりの奇怪なる話に、気が遠くなるほど駭おどろいた。話は分るけれど、そんな不思議なことが吾が身の上^にに在るとは、なんと
いう呪わしいことだろう。それにどんなにか慕したわしく思っていた
貞雄が、血を別けた兄妹であつたとは、なんと
という悲しいことだ

ろう。

「君の愕くのは尤もだが、まだまだ愕くべきことが控えているのだよ。——とところでいよいよ『三人の双生児』の謎だが、これは解いてみると案外くだらないものさ。こんなことを日記にかきつけたのは真一の父親だった。彼は船乗りだった。船乗りの語彙でもって『三人の双生児』といったことをまず念頭に置かなくちゃいけない。実は君の方は普通の健全な人間だったけれど、真一君の方はそうでなかった。彼は畸形児だったのだ。手も足も胴体も一人前だったが、気の毒なことに首が二つあった。つまり両頭の人間だったのだ。そういえば思い当るだろうが、真一君の肩にあるあのいやらしい癍痕きざずのところには、昔もう一つの首がついてい

たのだ。その首にはチャンと名前がついていた。西村真二というのだ。いくら子供が可愛くても、この両頭の畸形児を人に見せるわけにはゆかない。そこであの座敷牢があるのだ。君は女の児だと思っていたろうが、子供のときには男女の区別はハッキリしない。殊に終日寝かされて何の変った楽しみもない真一真二の幼童が、たまたま君の髪に結んだ赤いカンカンを見て、あたい達にもつけてよ才とせがんでも無理のないことではないか。そして二つの首を見せて駭かすことのないように、母親がいろいろ気を配ったことも無理ならぬことだ。その後、真二は顔に悪性の腫物はれものが出来たので遂に大学で未曾有みぞうの難手術をやり、とうとう切つてしまった。そうしないと真一までが死んでしまうおそれがあつたか

らだ。真一君が流浪の旅にのぼるようになったことなどは説明するまでもあるまい。僕は君を大学へ連れて行って、アルコール漬になつている真二君の首を見せたいと思うよ。——まあそんなわけだから、君たちが生れたときに、お父さんが『三人の双生児』と呼んだのも根拠のあることだ。身体から見れば双生児であり、首の方は三つあつたんだからネ」

ああ、なんという恐ろしい話だろう。これほど怪奇を極めた話だ、この世に二つとあろうか。妾は舌を噛み切つて死にたいような衝動に駆られた。といつて、舌を噛み切つて死ねば、妾の腹にある胎児は、暗^{やみ}から暗へ葬られるのだと気がつく、妾はハツと正気に返つた。そしてそこで妾は吾が子のまだ知らぬ父親のこと

が急に知りたくなつて、自らを制することができなくなつた！

「妾の腹の子の父親のことを教えて下さいな。どうぞ後生ごしやうですから……」

と叫んだ。

「ではそれを教えてあげようが、これから大学まで歩いてゆく道々話すことにしよう」

最早もはや妾たちは折角の料理に箸はしをつける気もなくなつて、そのまま外に出た。池いけの端はたを本郷ほんごうに抜ける静かなゆるい坂道を貞雄に助けられながらゆつくりゆつくり歩を搬はこんでゆく——が、妾の胸の中は感情が戦場のように激しく渦を巻いていた。

「君の胎はらの子の父親はねエ」

と貞雄は耳許で囁いた。

「——駭いてはいけない、この僕なんだよ」

「まア、貴方ですって、——」

妾はそれを聞くとカツとして、思わず貞雄をドンと突き飛ばした。

「ああ悪魔！ 恐ろしい悪魔！」

と妾は喚わめきつづけた。

「貴方と妾とは血肉を分けた兄妹じゃありませんか。それなのにこんな罪な子供をはらませるなんて……ペツペツ」

と、妾は烈しく地面に唾を吐いた。

「ま、そう怒ってはいけない。君は誤解しているようだ」

と貞雄は恐れ気もなく、傍に寄り添って来ながら、

「僕は誓う。また君自身も知っているだろうが、僕は絶対に君と性的交渉を持ったことはないのだ。ね、そうだろう。——だから怒ることはないじゃないか」

そういわれると、妾にもその忌わしいこといまの覚えはなかったが、それにしても……。

「じやあ、それが本当なら、なぜ妾は貴方の胤たねを宿したのです。誰が訛だまされるもんですか。嘘つき！」

「君と関係を持たなくても妊娠させることは出来る。——君は覚えていられるだろうが、この前僕が医師として君の身体を検べたときに、簡単な器械で君に人工妊娠をしないといたのだ。造作のないこと

だ」

「じゃあ、忌わしい関係はなかつたんですね」

と妾は稍安堵ややあんどはしたものの重ねて詰問をした。

「でもなんの目的で、妾を身籠らせたんです！」

「それは君、君の頼みを果したただけのことだよ。君は『三人の双生児』のことを知りたがつて、どんな手段でもいい、と云つたではないか、実を云えば、先刻話をした結論の中には欠陥があつたのだ。それは私の父と君の母親とが果して関係したかどうかということだ。それを僕は遺伝学で証明しようと思つた。調べてみると、君の母親の血統には両頭児の生れる傾向があるのだ。真一真二が生れたのは、君の母親が割合に血縁の近い従兄である西村氏

と関係したので、その血属結婚の弱点が真一真二の両頭児を生んだのだ。しかし僕の父とは他人同志だから、とにかく健全な君が生れた。そこで君が私の父の子であることを証明するには僕が考えた一つの方法があると思うのだ。それはそこでもう一度君が君の血族から受精してみると、きっと血族結婚の弱点で両頭双生児が生れるだろうという——これは僕が論文にしようと思つてゐるトピックスだ。そこで僕は学問のためと君の願いのため、僕の精虫を君の卵子の上に植えつけてみたのだ。その結果……」

「おお、その結果というと……」

妾はハツと思つた。

「その結果は、^{かぜん}果然僕の考えていたとおりだ。僕は偉大なる遺伝

の法則を発見したのだ。すなわち君がいま胎内に宿している胎児は、果然真一真二のような両頭児なのだよ。レントゲン線が明かあきらにそれを示して呉れたところだ」

「ああ、双頭児ですって？」

妾は気が変になりそうさ。

「僕の研究は一段落ついた。で、この上は君の希望を聞いてみたいと思う。その双頭児をこれから大学の病院で流産させてしまおうと思うのだがネ」

「ええどうぞ、そうして下さい。是非そうして下さい。妾は親となつて育てるのはいやです」

と喚わめき散らした。

そこで妾たちは、大学の医学部教室へ入った。

「ほら、これが真二の首だよ」

そういつて貞雄は硝子瓶の中にアルコール漬けになった塊を指した。妾はそれを覗いた。

「ああ、あの子だ」

それは確かに、妾の記憶にある懐しい幼馴染おきななじみの顔だった。実

になんという奇しき対面であろう。色こそ褪あせて居るけれど、彼の長く伸びた髪は、可愛いカンカンに結って、その先に色を失った三つのリボンが静かにアルコールの中に浸っていた。ああ、なんとという可憐な顔だろう。妾はそれをじつと見つめているうちに妾の考えが急に変わってくるのに気がついた。そうだ、今腹に宿

っている両頭の子供を下すのは思い止まりたい。例えそれが畸形児であろうとも、妾が母たることに違いはないのだ。血肉を分けたい可愛い自分の子に違いないのだ。流産して殺すなんてそんな惨^{むご}たらしいことがどうして出来ようか。

妾は貞雄が向うの標本を眺めている隙に、独りで教室をドンドン出ていった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1934（昭和9）年9、10月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「現代推理小説大系8 短編名作集」（講談社、1973（昭和48）年）を参考に、誤植が疑われる以下の箇所を直しました。（数字は底本のページと行数）

○316-上-1 キュウと唇と曲げて↓キュウと唇を曲げて

○320-下-22 遠く距《へただ》って↓遠く距《へただ》って

○333-上-15 【底本では、右の1行が脱落】↓「出鱈目だって」

○358-上-22 妾をそれを覗いた↓妾はそれを覗いた

※「妊娠」と「姙娠」の混在は、底本通りとしました。

入力…tatsuki

校正…土屋隆

2004年5月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

三人の双生児

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>